

神戸・南京をむすぶ会 / 第7回訪中団

- 上海・南京・大連・旅順フィールドワークの記録 -

2004年8月13日～21日



2004年8月15日 侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館前で

神戸・南京をむすぶ会

神戸・南京をむすぶ会(神戸・南京をむすぶ会)第7次訪中団(2004年8月)名簿

	氏名	性別	ローマ字	職業	
1	徳富 幹生	男	TOKUTOMI MIKIO	高等学校講師	※団長
2	飛田 雄一	男	HIDA YUICHI	団体職員	※秘書長
3	福島 俊弘	男	FUKUSHIMA TOSHIHIRO	教師	
4	宮内 陽子	女	MIYAUCHI YOKO	教師	
5	門永 三枝子	女	MONNAGA MIEKO	教師	
6	門永 秀次	男	MONNAGA SHUJI	団体職員	
7	波戸 雅幸	男	HATO MASAYUKI	無職	
8	井上 静香	女	INOUE SHIZUKA	学生(高3)	
9	福西 由紀子	女	FUKUNISHI YUKIKO	教師	
10	沼原 正春	男	NUMAHARA MASA HARU	無職	
11	和田 喜多郎	男	WADA KITARO	大工	
12	久保 裕史	男	KUBO HIROFUMI	教師	
13	三木 栄子	女	MIKI EIKO	教師	
14	尾上 勝 男	男	ONOE MASARU	無職	
15	寺脇 暢子	女	TERAWAKI NOBUKO	教師	
16	石橋 賢一	男	ISHIBASHI KENICHI	会社員	
17	小城 智子	女	KOJO TOMOKO	教師	
1	根津 茂	男	NEZU SHIGERU	僧侶	※大連旅順に参加
2	入井 真一	男	IRII SHINICHI	会社員	※大連旅順に参加
3	由 佳世子	女	YOU JIA SHI ZI	教師	※上海南京に参加

*

神戸・南京をむすぶ会 (中国名：神戸南京心連心会)

代 表：佐治 孝典

副 代 表：林 同春、佐藤 加恵

事務局長：飛田 雄一

<連絡先>

〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (財)神戸学生青年センター内

TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878

e-mail hida@ksyc.jp http://www.ksyc.jp/nankin/

●●=====

訪中の記録 (福島俊弘作製)

=====

【第1日】8月13日(金)

11:15 関空Gカウンター前集合
13:15 関空発 中華国際航空 CA922 便
14:35 上海浦東国際空港 (中国時間/時差
マイナス1時間)、徐明岳さん(中国国際友誼促進
会対外連絡部副所長)通訳の戴國偉さん出迎え。
滞在中の林伯耀さん親子も。
16:10 空港前バス出発
17:20 魯迅公園着 尹奉吉義挙現場 梅園
(尹奉吉記念館)
18:25 同発



19:00 ホテル着
19:30 ホテル2階で夕食
21:00 ホテル発、外滩 (バンド) 見学
22:05 同発
22:20 ホテル着
【上海郵電大廈泊】

【第2日】8月14日(土)



上海崧廬抗戦記念館



同記念館の陳賢明館長

8:35 ホテル発
9:00 魯迅博物館
10:10 同発
10:40 上海崧廬抗戦記念館
12:50 同発
12:55 昼食 (高登基酒楼)
14:05 同発 南京へ
19:10 南京 夕食 (明故宮大酒店)
20:00 ホテル着 雷雨停電2回
【中日友好会館泊】

【第3日】8月15日(日)



記念館で花輪をささげる井上さん、久保さん

9:05 ホテル発
9:20 旧南京神社 (五台山)
11:すぎ 侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館
で日中両国学者・市民代表者南京和平集会
12:00 同終了
12:25 歓迎昼食会へバスで出発
13:55 同終了

記念館で幸存者(伍正喜禧さん82才)の証言
 15:50 同終了
 16:15 ビデオ上映
 記念館見学
 17:20 記念館発



追悼集会で徳富団長のあいさつ

17:45 雨花台 遇難同胞普徳寺叢葬地記念碑(9721人)
 17:55 同発



雨花台 遇難同胞普徳寺叢葬地記念碑

中華門
 18:45 夫子廟 夕食
 20:10 同見学
 21:10 同発
 21:30 ホテル着
 【同上泊】

【第4日】8月16日(月)

8:00 ホテル発
 9:00 紫金山 侵華日軍南京大屠殺遭遇同胞東郊叢葬地
 掃除 献花 黙祷
 9:35 同発



9:45 孫中山記念館
 10:45 同発
 10:50 土産物店
 11:20 同発
 11:50 燕子磯 (3万余)
 12:30 同発



燕子磯南京大虐殺記念碑

12:45 昼食
 13:50 同発
 14:05 草鞋峡 (7千余人)
 14:20 同発



草鞋峡記念碑

14:25 煤炭港 (3千余人)

14:30 同発
 14:45 中山埠頭（萬人以上）
 15:00 同発
 15:05 ?江門（5100体余）
 工事中のため城壁上から 記念

館見学

15:55 同発
 16:20 関江楼 階段を登って長江展望
 17:35 同発 ホテルへ
 18:30 ホテル横で夕食
 【同上泊】

【第5日】8月17日(火)

7:15 ホテル発
 8:05 南京空港着
 9:25 同発 CZ3677 便
 10:30 大連空港着、崔曉東さん（大連市人民対外友好協会副秘書長、大連市外事弁公室対外友好合作服務中心主任）、胡冰俠さん（同通訳）、何辛卯さん（中国国際友誼促進会対外連絡部主任）出迎え
 11:35 大連空港発
 12:00 ホテル着
 12:30 ホテル2階で昼食 その後休憩
 14:40 ホテル発 案内 崔曉東さん（大連市人民対外友好協会副秘書長／大連旧司法局 市役所）
 15:05 同発
 15:10 労働公園 市内眺望
 15:20 同発
 15:25 旧東本願寺 車窓から旧日本人街
 15:55 同発
 満鉄病院(車窓)



旧満鉄本社跡

旧大和ホテル コーヒー
 中山広場
 17:35 同発
 18:00 ホテル着
 18:15 夕食 李華蓉さん（中国国際友誼促進会秘書長／中国人民対外友好協会理事）
 夕食後 市電で大連駅前へ

【大連万達国際酒店泊】
 大連市 <http://www.dalian.gov.cn/i18n/jp/>

【第6日】8月18日(水)

9:05 ホテル発
 10:25 金石灘着
 亀裂石
 11:00 同発
 11:15 蠟人形館
 11:45 同発
 12:15 昼食 東方大厦
 13:35 同発
 14:10 ロシア人街 勝利橋
 14:50 同発
 15:00 大連港
 16:00 同発



大連港

16:05 満鉄本社
 16:15 同発
 16:30 ホテル着
 17:00 勉強会 講師・宮内陽子さん
 19:00 夕食 日本料理
 【同上泊】

【第7日】8月19日(木)

8:40 ホテル発
 9:35 東鶏山北保塁
 10:45 同発
 10:55 旅順日俄監獄舊址
 12:10 同発



旅順監獄

12:15 昼食
 13:35 同発
 13:40 万忠墓
 14:20 同発
 14:35 203高地
 15:20 同発



203高地



203高地より旅順港を望む

15:35 水師營
 16:00 同発
 17:25 夕食
 20:00 同発
 20:10 ホテル着
 【同上泊】

【第8日】8月20日(金)

9:35 ホテル発
 9:55 星浦海水浴場 展望
 海岸 足型
 10:40 同発



纏足の足型が見える

11:05 老虎灘
 11:25 同発
 11:35 みやげ物店 シルクの絨毯
 12:20 同発
 12:35 昼食
 13:50 同発
 14:00 ホテル着
 5グループで自由行動
 18:05 ホテル発
 18:35 夕食 夜景
 21:00 ホテル前で2次会
 【同上泊】

【第9日】8月21日(土)

9:05 ホテル発
 9:30 大連空港着
 10:50 同発 CA151 便
 13:55 関空着(日本時間)
 14:40 解散

なぜ今旅順か 旅順虐殺を語り継ぐ意味

宮内陽子

今夏「神戸・南京を結ぶ会」は、南京と合わせて訪ねるもう一箇所の地として旅順を選びました。

旅順というと、今年百年目を迎える日露戦争を思い起こす方が多いことでしょう。味方の戦死者の屍を踏み越えて戦われた203高地の攻防、「♪庭にひとと棗の木～昨日の敵は今日の友」と歌われた水師営での乃木・ステッセルの会見、そして非戦の立場から、旅順要塞を攻撃中の弟へ呼びかけた与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」はあまりにも有名です。

しかし、日露戦争の10年前に行われた日清戦争時の旅順虐殺事件については、殆ど知られていません。1894年7月25日の豊海沖海戦に始まった日清戦争は、9月16日平壤占領、同月17日には黄海海戦に勝利し、日本は制海権を獲得、10月24日には清国の遼東半島に大山巖大將率いる第二軍が上陸、清軍の激しい抵抗を排除しながら、11月21日旅順に突入しました。そのとき4日間にわたって日本軍が起こしたのが旅順虐殺事件です。

ある兵士はそのときの状況を、「支那兵ト見タラ粉ニセント欲シ旅順市中ニ人ト見テモ皆殺シタリ。故ニ道路等ハ死人ノミニテ行進ニモ不便・・・人家ニ居ルモ皆殺シ大抵ノ人家ニ、三人ヨリ五、六人死者ノナキ家ハナシ。」(岡部牧夫「一兵士の見た日清戦争―窪田仲蔵の従軍日記―」)と記しています。また、第二軍司令部参謀部付法律顧問の有賀長雄は、「戸外及戸内ニ在ルモノハ死体ナラサルナク、特に横路ノ如キハ累積スル屍体ヲ踏み越ユルニ非サレハ通過シ難カリキ。」(「日清戦役国際法論」)と記しています。

この虐殺の原因は、その後の政府の弁明によると、一、市内に入った日本軍が、先発の友軍戦死者の死体が切り刻まれ、生首が晒されているのを見て激昂したから、二、一般市民を殺したのではなく、逃亡して平服に着替えて潜伏していた清国兵を捕らえた、ということになっています。上述した有賀も、総崩れとなった清国兵が、市内で散発的に抵抗し、また夕暮れで、視界がおぼろだったと述べています。結果として2万人にのぼる投降兵、市民が殺されたといわれていますが、今となっははいったいどの程度の規模の事件だったのか、正確なことは分かりません。

この事件は、現地で戦争取材していた欧米の新聞記者によっていち早く本国に知らされました。訪日したその記者の一人から事件を知った陸奥宗光をはじめとする政府関係者は、事態の重大さに驚愕します。政府は事件の存在そのものを認めざるを得ませんでした。が、時あたかもアメリカとの不平等条約改正交渉が大詰めを迎えているということもあり、弁明に終始し、事件が忘れ去られるのを待ちます。一方、厳しい報道官制の敷かれた当時であって、外国人居留地以外の新聞にはこの事件は報道されず、国民の大多数は知らされないままでした。(かのラフガディオ・ハーンは、神戸の居留地で発行されていた「神戸クロニクル」に「婦人、子供や非戦闘員に対する不必要な残虐行為については、その行為を犯した者たちの行動に責任を負う将校たちを厳格に罰するべきである。」との論説を載せ、事件を批判しています。)

この事件を南京大虐殺と比べると、いくつかの相違点と、多くの共通点とがあります。まず、上述しましたように、当時の政府は、外国の世論に大変敏感で、最低限認めるところは認め、一方弁明も必死になって行っています。明治維新後わずか30年足らず、不平等条約の撤廃に四苦八苦する小国としては当然のことだったのでしょう。しかしたとえ小国なりとも、日清戦争開戦の詔勅には「国際法規の範囲で」との文言を入れるなど、初め

ての対外戦争を戦う際、「ルールにのっとり正々堂々と」戦いたいとの「矜持」も持っており、精一杯背伸びして、欧米に並ぶ文明国として認めてもらいたいとの思いも強かったことと思われます。しかし、旅順虐殺から43年後の1937年、南京大虐殺を起こした日本は、国際世論は殆ど気にも留めなくなっていました。「大国」となった日本にとって、国際世論は恐れるに足るものではなく、日本の暴走は歯止めが利かなくなります。その結果として、1945年の悲慘な敗戦を迎えることになったのは周知のとおりです。

一方、外国人記者や生存者が証言する旅順と南京の日本兵の暴行、殺戮は、驚くほど似通っています。中国人を人間とは思えぬような方法で、また命乞いをする女性や年寄りを一顧だにすることなく殺害して行くのです。また、事件の原因が清国兵による死体損壊だけでなく、市内突入直前の激戦にあり、予想外の死傷者に復讐心に駆られた指揮官の姿勢が関与していたことも南京と同じです。更に、旅順市内突入を前に三光作戦とも呼べる掃討を行っていたことも明らかになってきています。責任者の処罰、被害者への謝罪・賠償、原因の究明、再発防止のための教育がないのも同じです。

人間性を失わせられている日本軍兵士、そのように戦わしめ、責任をとろうとしない日本政府。明治以来、脱亜入欧を目指し、アジアを蔑視しつづけてきた日本の社会風土が、何遍も同じ過ちを繰り返させているのだと言えます。日清戦争後に作られた数々の流行り歌の歌詞に、清国が「暴戾」である、「鷹懲」せねばならないという言葉が出てきます。日中戦争の時、戦争の目的は「暴戾支那を鷹懲す」るためと言われました。今現在、「中国に大きな顔をさせておくものか」という論調が勢いをつけてきています。この百年間、何が変わったのだろう、という思いに駆られます。

中国ではこの事件は当然のことながら発生当初から広く知られています。旅順占領後、日本は犠牲者の遺体を廃船の木材などを使って燃やし、一ヶ所に集めて土饅頭を作り、「戦死した清軍兵士の墓」と書いた木碑を立てました。中国人はこれを「萬人坑」と呼びました。三国干渉の後日本軍が去ると、中国人によって石碑が建てられ、「萬忠墓」と刻まれました。日露戦争後、再び日本が占領すると、石碑が盗み出されるなど、たびたび墓に対する破壊工作が行われました。日中戦争後中華民国政府により、新しい墓が建てられ、中華人民共和国誕生後、旅順博物館による聞き取り調査、が始まり、展示室も造られ、日清戦争後百年目の1994年、墓の発掘作業が行われました。そのときに出土した遺骨、遺品を記念館に展示しています。事実を語り継いでいこうとする中国側の意思を感じます。

私がこの事件を知るきっかけになったのは、1988年の朝日新聞に載った加藤周一さんの「夕日妄語一」を読んだことです。それ以来、ずっと気になり続け、心の片隅に引っかかっていましたが、今夏やっと旅順を訪ねることが出来、事前の学習も含め、この事件の全容に少し触れることが出来ました。知れば知るほど、どうしてこのような大事件が日本で知られていないのかと、日本の歴史教育に携わるものとして責任を感じざるを得ませんでした。また、私自身も機会がなければ深く知ることが無かった、と言うことは、まだまだ私達が知らないことは数多くあるのだ、と言う当たり前のことを改めてそろそろしく感じています。

また、萬忠墓記念館で購入した、「永矢不忘」（永遠に忘れない）という旅順虐殺事件の最新論文集に、多くの中国側研究者の論文と並んで、加藤さんの先の記事が載せられているのを見て、中国人の心情に触れた思いがしました。ある日の、外国の新聞の片隅に掲載された記事に目を留め、それを大切にピックアップして論文集に載せる中国人の思いを、「そんなことは無かった」、「中国人のでっち上げだ」「反日思想だ」とあいも変わらず叫んでいる人達に知ってほしいと思います。事実を事実として知り、事実の重みの前に頭を垂れ、その事実を心に刻み、記憶に留めることが今こそ求められています。二度と同じことを繰り返さないために。



南京虐殺記念館広場で 団長・徳富幹生

「平和の鐘」との対面

記念館への入口を入ってすぐ
わたくしたちにもなじみのある
神戸在住の華僑の方たちの願いが実って
製作され贈られた「平和の鐘」が
わたくしたちを迎えてくれた

釣鐘にそっと触れて
遠慮がちに撫でて二度、三度・・・
額からしたたり落ちる汗が
とめどなく唇を濡らし
しょっぱいような味をにじませる
気がつけば
汗の味とはちょっぴり違う
温かい液体が
一滴二滴
臉からもれ出たような



侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館「平和の鐘」

追悼式

わたくしたちと一緒に
高校生のIさんが参加していることが
嬉しい
追悼式が始まって
50人ほどの中国人高校生の姿が
目に入り
嬉しかった

加害の国の若者と
被害の国の若者がともに
戦争の残虐・非道・不正義がもたらした
「現実」を
凝視し体感できる
「歴史の現場」に立っている
心に刻みこまれずにはいられまい「歴史の現実」
から
若い感性は
どんな思いと願いを生み出すだろうか



記念館庭のレリーフ



「五感で知った中国」 井上静香

神戸南京をむすぶ会に、初めて参加させていただきました。中身が濃すぎるぐらいとても充実した9日間でした。特にこれというきっかけはなく、小さいころから「中国」という国に何かと惹かれ、今では言葉を学びたいと思うようになりました。そして学校の課題研究（卒業論文）では、中国に関することについて書きたいと思っていました。そんな時、この団のことを、耳にしました。

〔南京〕

訪れるまでは「1937年、日本人が南京において中国人を大量に虐殺した」そう教科書で学ぶ知識としての南京でした。南京までの道のりバスから見える、古い民家。バスを降りすっかり現代の雰囲気をもった南京市内。どちらも、かつては日本軍が悲惨な場所へと変えた所です。その町の様子が何とも印象的でした。実際に戦争が起っていた場所へ足を踏み入れ言葉にはできないも

のを感じました。「侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館」、膨大な数の写真や当時のものなど初めて目にするものばかりでした。日本が加害者として記録されたのを見るのも初めてで、正直ショックでした。頭では解っている、同じ日本人の血をもつ者として、その衝撃は少なくはありませんでした。中国の人からはこう見られているんだ、というのを実感しました。そして、自分の足で長江のすぐ側まで行くことができました。かつて、今では静かな波も山や河が人の血で赤く染まり、今見ている長江の水面にはおびただしいほどの遺体が折り重なっていた、そう思うとやはりぞっとします。現場へ行くと写真や映像で見た当時の情景がどうしても重なって見えてしまいました。恐怖に怯えながら逃げ惑う人々など。長江の流れは穏やかでそのギャップがとても大きく感じられました。

間近で南京大虐殺の幸存者である伍さんのお話を聞くことが出来ました。言葉は直接理解出来ないけれどあれだけ広い部屋にもかかわらず、そこに収まらない身体全体が押されるような空気を感じました。本などの字やテレビの映像で見ると、お話を聞いていてその情景が目の前に広がるようでした。証言の後、握手をさせていただきました。私の手を握るその手の暖かさが本当に言葉になりませんでした。そして、日本がしたこの悲惨な事件を私たちが伝えていかなければいけないと改めて思い知らされました。

【旅順】

旅順は南京ほどあまり耳にしたことはありませんでした。しかし今回、勉強会や事前学習を通して「旅順虐殺」のことを知り、学び、そして改めて南京大虐殺について考えさせられました。同じ間違いを二度も起こしたこと、過去をしっかりと見つめない誰が否定しようとも、それは事実だと私は思います。二〇三高地に登り自分の目で旅順口を眺め、当時もこんな風に見えていたのかと思いながら見ていました。戦艦も何もない旅順口。今の時代が平和ということを感じました。



大連で在日華僑の友人の娘さんと

大陸から離れている日本はすでに、過去のことは過ぎ去ったことでごく一部以外さっさと忘れていっているような気がします。同じく忘れていっているには語弊がありますが、南京は昔あれだけの被害を受けながら、他の都市のように現代の雰囲気もしっかりともっていました。67年も経っているのだから当たり前かもしれませんが、私の頭の中ではパネルや写真、映像で見たそのままだが焼きついています。そのため、ギャップを感じました。上海から南京までのバスの道のりも、かつては日本軍が侵略していった道と考えると言葉もなく押しつぶされるような気がしました。

中国を訪れ、たくさんの人々と物事に会いました。そのたびに、考えなければいけないことがどんどん出てきて、整理が追いつかないといった状況です。今、戦争に関係ないからと言っても忘れてはいけないことがたくさんあり、悲惨な事実も過去もちゃんと自分で噛み砕いて吸収しなければいけないと思います。目を背けて、忘れてしまえば楽かもしれませんが、しかし、他人任せでは何も解決しません。前進するよりむしろ後退していると思います。中国ではその地理的な広さだけでなく人の、例えば幸存者の方の心の広さも感じました。普通なら責めたり非難したりしてもおかしくはないと私は思っていました。でも、ちゃんと真っ直ぐ目を見てお話をしてくださいました。この事実をもっとたくさんの人に知って欲しいと思います。若い世代の人たちには特に。遠い過去かもしれないけれど、それは私たち日本人が歩いてきた足跡でもあります。道を間違えてつけてしまった足跡でも、一度立ち止まって振り返ればもう同じ間違いはしないはずです。今こそ振り返り向き合う時だと私は思いました。

今回、団に参加させていただき、初めての海外初めての中国を訪れることが出来ました。人生初めて外国の地を踏むのが、中国で本当に嬉しかったです。生の中国に触れ、学ぶことがたくさんありました。たくさんありすぎて、まだ整理整頓が追いついていない状態ですが、時間をかけてでも自分で整理していきたいと思います。最後になりましたが団長の徳富先生、貴重なお話をたくさん聞かせていただきました。秘書長の飛田さん、初めての参加ということもあり色々気遣っていただきました。そして宮内先生、本などの資料も送っていただき本当の生徒のようにその場所場所で様々なことを教えていただきました。何もかも初めてのことでご迷惑を多々おかけしたと思います。皆さん本当にありがとうございました。お世話になりました。

今回の旅行に参加して思ったこと 久保 裕史



燕子磯で

今回の旅行に参加した目的は、南京で旧日本軍が行った数々のひどいことを何冊かの本（笠原十九司、本多勝一など）を読んで知り、実際に現場に行き自分の目でしっかりと確かめてから、きちんと子どもに教えていかなければいけないと感じるようになったからである。そして旅行中に思ったことは、やはり実際に来て、戦争中にあったことを体で感じられたことが何より大きな収穫だったと思う。中学生の時に「三光作戦」のことは教えられていたが、戦後59年も経つのにその反省があいまいなまま現在まで続いているということを最近知り始めて愕然としている。しかし、とにかく今は精一杯勉強して子どもたちに正確な事を

きちんと教えていくことが私にできることだと思う。

まず初日に上海戦争記念館を見学すると、中国で戦争中に日本が行ったことを次の世代にしっかりと伝えていこうという気持ちがすごく感じられ、上海の事ももっと勉強していかなければいけないと感じた。そして上海から南京へと続く「長い道」をバスの中で十分感じ取ることができ、初めて南京に入ったときは正直言って恐かった。「どれだけここでひどいことをしたんだろう。」ということで頭がいっぱいだった。そして翌日に南京大虐殺記念館で集会をしていた時の周りの中国人の表情をしっかりと頭に残してきた。その時その場でしか感じることをできない事をしっかりと感じる事ができた。それから当時14歳の時に南京事件で被害を受けた方の証言を聞き、この事も伝えていかなければいけないと思った。そして記念館を見学していったが「遺骨」の前に立つと、やはり無言の訴えを感じざるをえなかった。もっと時間をかけて見学したかったが、また今度きて、時間をかけて見学しようと思う。それから次の日に虐殺現場のフィールドワークをしたが、遺体の埋葬地や数々の虐殺現場に行くうちに本の中で想像していたことがその場から少しずつ感じられ、やるせない気持ちがずっとしていた。「揚子江」

（長江）を目の前にした時は、殺された中国人の恨みが残っている川としてしか見るができなかった。2日間にわたり南京でしっかり勉強をして、予想はしていたが精神的にまいってしまった。

そして南京を離れ、大連に来て最初はゆっくりとしたスケジュールで少しリラックスできた。大連も戦争中に日本人が占領していたので街の中のいたるところで日本が占領していたときの建物の多くが残されているのを見て、やはり実際に現場に来ないとわからないなあ、とあらためて思った。祖父が奉天の満鉄で働いていたので、大連の旧満鉄の本社の建物を見ると申し訳ない気持ちがした。大連の事ももっと勉強しなければいけないと思う。

次の日は旅順に行き、旅順虐殺で殺された中国の人が埋葬されている「万忠墓」を見学させていただいた。旅順虐殺について書いてある本は少ないので子どもに教える自信があまりなかったが、「万忠墓」に来ると、教えていかなければいけないと強く思うようになった。そして旅順監獄も見学させていただき、ここでも日本は戦争中に中国の人に対して本当にひどいことをしていたんだなあと感じた。

まだまだたくさん感じたことはありますが、特に印象に残っていることを書いてみました。飛田さんには旅行の申込から最後までお世話になりました。ありがとうございました。南京大虐殺記念館で親切に説明していただいた門永さん、ありがとうございました。旅行中いろんな所でご迷惑をおかけしましたが、いろいろと助けていただいた皆さんに感謝しています。



「南京・旅順・大連の旅」 宮内陽子

南京・旅順・大連の旅から帰り、決心したとおり、周りの人に旅の報告、とりわけ「旅順虐殺」の話をしています。やはり誰一人、「旅順虐殺」のことは知りません。「南京虐殺」のことすらあいまいなままなのですから、当然といえば当然なのかも知れません。中国に行って見聞きしたことと、日本での認識とのギャップを改めて感じています。「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも目を閉ざすことになります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」とのヴァイツゼッカーの指摘がますます現実味を帯びて感じられる今、「旅順虐殺」について語る意味も大きいと思います。

今回の旅では、特に何人もの方の遺骨のことが心に残りました。まず最初は、南京の大虐殺遇難同胞記念館で数年前に新たに発掘された遺骨。私たちの8年間に亘る旅は、一年ごとにその遺骨と対面する旅でした。最初は「このあたりも虐殺現場なのですよ。」との説明を聞きながら、それはそうなのだろうと、足裏に犠牲者の気配を感じつつも、でもまさか自分がその遺骨の真上を踏んでいるとは思わず、記念館の庭を歩いていた。翌年、「館の拡張工事のために掘ったら、遺骨が出て来ました。」と知らされ、ブルーシートに囲まれた発掘現場の遺骨と対面しました。掘り出されたばかりの遺骨は、60年の眠りから思いがけず目覚めさせられたという姿そのまま、銃剣の跡も生々しく、大人のものも、小さな子どものものも、虐殺の悲劇を精一杯私たちに訴えかけているようでした。次の年、発掘現場は保存のためにコンクリートの館で覆われていました。ガラス越しに対面する遺骨には、数字を書いた札が付され、既に風化が始まっているからでしょうか、発掘当時の

生々しさは薄れて見えました。その後、毎年訪ねるたびに風化の度合いは進んでいて、今年、二年ぶりに対面した遺骨の傷み具合に胸を衝かれました。銃剣跡からは更にひびが走り、子どもの小さな遺骨は碎けて、離れた所から見たのではそれとはわからない状態になっており、訴え続けるのに疲れたかのように感じられました。遺骨はもちろん、保存のための処理はなされているのですが、自然の力には抗えないのかもしれない。

旅順では、ロシアと日本の支配時代に使われた監獄跡と、旅順虐殺の犠牲者を弔う万忠墓を訪ねました。監獄で死刑にされた人々は、死後硬直が進む前に身体を折り曲げ、小さな木桶に入れられ、墓地に埋められたそうです。それは埋葬という言葉が持つ弔いの気持ちのかけらも無さそうな扱いでした。絞首刑が執行された部屋には、天井から下がった三本束ねた縄（一度に三人死刑執行したそうです）、その足元の、階下に開いた床、一人がやっと立つだけの空間しかない執行を待つための部屋（壁の中に作られた棺桶という表現のほうが正しいかもしれません）などの寒寒とした装置と並んで、朽ちた木桶が置かれていました。桶の隙間からは、白骨化した犠牲者が座っておられるのが見えました。



大連のホテルで旅順虐殺の勉強会、講師の宮内さん

万忠墓に併設された記念館では、骨片と対面しました。日清戦争・旅順虐殺100年を機に、お墓の発掘が初めて行われ、110年前殺されて燃やされ、一ヶ所に集められた方々は、新しく作られた大きな美しい棺桶に収められ、埋葬されました。10年前のその儀式の日、地元の子どもたちでしょうか、政府関係の大人の人たちに続いて、手に持った土を丁寧に棺桶にかけている写真が展示されていました。遺骨の一部は、ガラスケースに展示されていました。燃料として使われた木造

船の金具に付着した骨片は、もはやどなたのものともわかりません。傍に並べて展示されていた、アクセサリーやボタンなどから、女性や子どものものと推し量られるに過ぎません。その方々と、ガラス越しに見下ろす私とは、100年の時の流れ以上に、想像を絶する立場の違いによって隔られているように思いました。

どこの万人坑を訪ねても感じましたが、自分の骨を公に人目にさらしたい人がいるのでしょうか。人の情けとして当然の、死者を尊重するという大前提に背いてでも訴えかけねばならない歴史をつくりだしたのは見下ろしている私の国、日本の一人一人です。

私は観光に来たんじゃない、歴史を学びに来ている、悲劇の実態を見つめなければならない、とは思います。一方で、私には動く手足も見聞きする眼も耳もあり、見学が終わればホテルに帰り、おいしい中華料理の夕食を冷えたビールとともに食べることができる。でも遺骨は何十年も土の中に埋もれていただけではなく、これからもずっとこの場所に「展示」されたままなのだと思うと、私と遺骨との距離の大きさに肅然とせずにはいられません。

どの遺骨もその一体一体には、今私がそうであるように、肉があり、髪の毛があり、服も着、しゃべり、笑い、食べ、眠っていたでしょう。一人一人、その名を呼ばれてもいたでしょう。110年前の旅順に私が住んでいたとしたら、私が今、骨片となってケースの中にいたとしてもおかしくないのです。私が被害者でないのは偶然に過ぎません。私が、彼らだったとしたら、ケースをのぞき込む日本人に何を言いたいのだろうと考えます。その人生を奪ったものの側にいるものとして、死者のまなざし、思いを感じながら生きていかねばならないと、改めて思います。

思えば、私たちはいくつのまなざしに囲まれて生きていることでしょうか。何気なく毎日を送っていますが、自分が訪ね、見聞きした場所だけでも、数万ではきかないまなざしに囲まれています。中国・韓国・沖縄・長崎・広島・松代・荒川土手……。そのまなざし、思いに応える生き方を日々探ることで、「現場」に立った者としての責任を果たしたいと思っています。

今回の旅では中国の方々が、日本人が訪問するのは難しい場所への許可を出して下さいました。

「国の恥」を越えて、歴史の事実を日本人に示し、一方で、新しく発展している今の中国を誇らしげに見せて下さいました。このような一本一本の糸のような日本人と中国人の結びつきが、束ねられ、友好の絆になっていくことを実感しています。中国側の沢山の配慮に本当に感謝しています。

また、徳富団長、飛田秘書長をはじめ団員の方々の力が無ければ実現しなかった旅です。最後になりましたが、心よりお礼を申し上げます。



旅順萬忠墓記念館

●● 中国東北地方を訪ねて 根津 茂

8月15日を南京で過ごしたい。そんな思いは以前から強かった。そんな私が南京を訪ねたのは、事件から65年目の厳冬。身も心も凍りつくようだった。そのとき以来、事件に至る道をこの目で見たいと思った。「満州」とよばれた東北の大地を歩いてみたかった。



関空から大連に着いた私は、夕刻「神戸・南京をむすぶ会第7次訪中団」の皆様とお会いした。翌日は一緒に旅順へ。日清戦争のとき、無辜の民を殺戮した旅順虐殺事件。まさに「大日本帝国」の戦争の原型のように思えた。こうした「過ち」に目を閉ざしたことが、次から次へと残虐行為を繰り返し、「南京」に至ったのだと痛感する。名残惜しいけれども「神戸・南京をむすぶ会」の皆様とお別れし、ひとり航空機でハルビンに向かった。



731部隊のボイラー室跡

まず、郊外の平房へ。口に出して表現するのもおぞましい731部隊による人体実験・細菌兵器の製造。その場を歩いた。最初に、部隊長石井四郎の部屋のある本部の建物で、人体実験の道具などを見た。外へ出てまず目にしたのは、「アウシュビッツ」で見たような鉄道の引込み線。「マルタ」と呼ばれ「実験」に使われた人々が、ここから入れられたのであろう。ここは「出口のない入口」。気味の悪いボイラー室の2本の巨大な煙筒。厳寒の地で、人間を暖めるのではなく、細菌を適温に保つためだという。人体実験室、凍傷実験のための冷凍庫、細菌培養のための動物飼育室、そして巨大な監獄。こうした施設の跡を歩くと、「マルタ」とされた人々のうめき声が聞こえてくるようだ。背筋が凍りつくような思いになる。以前「アウシュビッツ」で感じたような恐怖と、人間そのものがもつ「罪業」に向き合う。しかしここは、我らの祖先が自ら手を下した場である。しかも、この「主人」たちは戦後も免責され、医学の「研究」を続けた。私たちの責任とは何なのか。医学や科学技術の進歩とは何だろうか。

雄大な松花江のほとりハルビンは美しい街だ。ロシア風である中央大街や太陽島では、まるでヨーロッパにいるかのような気分だった。同時に外国勢力に翻弄された近代中国の苦難を感じる。

ハルビンより長春へは鉄道で3時間、東北の原野を走る。列車から見える広大な大地と、赤い美しい夕陽。この「満州のロマン」に惹かれた人びとが、「開拓民」として日本からこの地にやって来た。そして彼らの「開拓」はこの大地に住む人々の土地と生活を奪った。そんな「夢」はやがて「悪夢」となる。多くの孤児たちの悲惨な運命。しかし彼らを救ったのは、日本に侵略され辛酸をなめたこの地の人々だった。昔の「満鉄」を走りながらそんなことを思った。



長春にある溥儀の「宮殿」

長春は、かつての「満州国」の首都「新京」である。駅からホテルに向うとき、先ず目にしたのは、かつての「満鉄本社」と、威圧的な天守閣がそびえる元「関東軍総司令部」の大きな建物である。このことは、「五族協和の満州国」の、ほんとうの「主人」が誰なのかを明らかにしている。ここにはラストエンペラー溥儀の「宮殿」や「満州国政府」の建物がいたところにある。「満州国首都」として、「都市計画」が整備され緑多い街であるが、日本の支配の跡を重苦しく感じる。現地の人々にとっては忌まわしい「満州国の建物」は、溥儀の「宮殿」が「偽皇宮」とよばれる名所となり観光収入を稼ぎ、その他の建物は共産党と政府の機関として使われている。中国の人々のたくましさとしたたかさを感じる。

長春から列車に乗り瀋陽に向かう。瀋陽北駅に到着する直前、列車は「柳条湖」を通過。緊張の瞬間だった。1931年9月18日の「柳条湖」。ここでの事件が、あの悲惨な15年戦争の始まりであった。この場こそ私たちが心に刻まなければならない「憶念の場」である。「9・18歴史博物館」を参観した。日本の東北支配、「満州国」の実態が

展示されている。厳しい収奪、おそろしい拷問の道具、犬に食べられる中国人の写真など。それら一つひとつにショックを受けた。

日本を脱つ前、NHKで「満州開拓民」の悲惨な様子が放映された。この人たちのことも忘れてはならない。しかし「開拓民の悲劇」はソ連の参戦による敗戦のみがもたらしたことなのか。それよりも戦争を始め、異国の地を踏みについたことこそが最大の悲劇の因ではないだろうか。「9・18」を忘れ「8・15」のみを記憶することは道義的ではない。



柳条湖事件の現場にある9.18 歴史博物館

博物館の脇に、関東軍が線路脇に建てた巨大な「炸弾碑」があった。自ら線路を爆破し軍事行動を起こした関東軍が、誇らしげに巨大な石碑を建てる無神経さに悲しくなる。鉄道の線路に出た。ここが2000万人以上のアジア・太平洋の民を犠牲にした15年戦争の始まりの場だと思うと体が震える。ここから数キロ離れた皇姑屯の「張作霖爆殺事件」の場も訪ねたが同じようなものを感じた。

瀋陽からタクシーでまる一日かけて撫順を往復。タクシー代は極めて安い。まず平頂山虐殺事件の「万人坑」を訪ねた。1932年日本軍に村ごと消され殺害された村民の遺骨が当時のまま保存され「歴史を記憶する場」となっている。ご遺骨一体と向かい合うと悲痛な気持ちになる。生まれただばかりの赤ん坊、抱き合う親子、家族3人重なっている遺骨。なかには銃剣や日本刀で切られた遺骨もある。一人ひとりのかけがいのない人生と命が奪われた。こうした「万人坑」は中国のいたるところにある。

撫順は石炭の町である。広大な露天掘りの炭鉱を見た。坑内の鉄道がおもちゃのように小さく見

える。蟻地獄の巣のようなこの炭鉱は、「満州時代」多くの中国人労働者が酷使され多くの犠牲者の屍の上に造られたと思うと胸が痛む。

最後に訪ねたのが「撫順戦犯管理所」。戦後、溥儀や日本の戦犯が入れられた所である。彼らの部屋を見た。ここで彼らは、人道的な扱いを受け、一人も処刑されず、一人ひとりが罪と向かい合い改悛した。戦犯たちの多くが帰国後中国との交流に尽したという。当時の国際情勢や、先を見通した「対日関係」を考慮していたとしても、建国初期の「新中国」の道義の高さを感じる。

今回の旅は、近・現代史の史跡だけではなく、多くの場を訪ねた。ハルビンから日帰りで女真族がたてた金王朝の古都上京（阿城市）へ行った。金の太祖阿骨打の宮殿や陵墓がある。そして瀋陽では清の故宮のほかヌルハチやホンタイジの陵墓などを参観した。多くの民族が興亡し共存した広大な中国東北。そうした大地の中での日本の蛮行。こうした歴史の真実を忘れてはならない。

そして、この地から日本が見える。私たちは過去から何を学んできたのだろうか。今の日本を見ていると、歴史の事実など忘れてしまったかのようで嘆かわしく思う。残留孤児を中国の貧しい農民が育ててくれたことや、戦犯に対する寛大な扱い、さらには賠償放棄なども忘れてしまったのか。中国の大地に立つと、歴史の歪曲や靖国参拝などがいかに時代感覚を見失った愚行以外の何ものでもないと思う。自衛隊のイラク派遣や「改憲」への動きなど、いったい日本はどこに行こうとしているのか。そんなことを思った。そして70年代に西ドイツの首相をつとめたヴィリー・ブランドの次の言葉を思い出した。「私たちは、自らの歴史を冷静に見つめる用意がなければならない。なぜなら、過去に何があったかを思い起こせない人は、今日何が起きているかを認識できないし、明日何が起こるかを見通すこともできないからである」人間とは過ちを犯しやすいものである。歴史を心に刻み、胸中に抱いていることは、そうした過ちを最小限にする道だと思うとともに、近隣諸国の人々との交流の基本であると強く感じた。

最後に、今回の旅の最初の2日間のみ行動を共にした「神戸・南京をむすぶ会第7次訪中団」の皆様にお礼を申し上げたい。「旅順・大連だけでも一緒に」との飛田さんの温かい言葉に甘え同行させていただいた。出会ってすぐ別れる名残惜しさ

を感じた。訪中団の皆様に心から感謝するものである。



大連の勝利橋（旧日本橋）

●● 第7回訪中団に参加して 三木栄子

5年ぶりに参加することのできた今年。前回の子連れの時と同様、皆様にはお世話になりました。今年は他に勉強したい事があり、バタバタしたまま、宮内さんから資料を頂きながらも、熟読もできず参加させて頂きました。飛行機に乗る時から既に「しまった！」感を持ったのは、やはりこの団の方たちは並のツアーとは全く異なる人達だったと実感することになったから。皆さんにしたら、いつもの事といった感じの会話ですが、「上海の……は第……軍の兵士が……したところで……」(「旅順は……年に……が侵略したけど……」)(「……部はその時私が全くついていけなかったので、書くこともできなかった事を表します。しかもその中に中国語やら韓国語やらが混ざる!」)歴史研究者の団体に紛れ込んだおばちゃん状態で、「誰か私に聞かないで……」と言う表情であつたろうと思います。後の祭りではありましたが、『考えるよりまず行動』と言うモットーで生きる私は、「行って見てみることに」と、居直って機内食を平らげたのでした。

昨年始まってしまったアメリカのイラク攻撃。テロがなぜ起きるのかさえ考えずに、『攻撃は最大の防御』と1度もアメリカを攻撃したことの無い国を爆撃し、3万人を越えるとも言われる一般人を殺戮する現代社会。(南京同様、殺された人の数は数えることさえできない。《以上とか程度》が人

の死に使われても、不自然さや非道さを感じないなんて!!!)殺人をテロ防止と言い換え、「なぜアメリカは世界中に憎まれるの?」と無邪気に聞き、反省しようとしめない国と、それに追随することが国際貢献という首相のいる国、日本。そんな現代社会の感覚は、今初めて地球上に生まれた訳ではなく、中国を侵略した時の軍国主義時代の雰囲気そのままなのではないか。おかしい、おかしい、と思いながら何もしなかったあの時の日本人と同じなのではないか。何かしなければと感じていても、「何もできない……」「……ま、いいか。」と済ましている私は、後の時代の人々から、「あなたたちは、戦争に反対しなかったの?」と、問いただされるのではないか。……これを戦前という時が来るのではないか。

昨年来のこの実感を伴った強い不安は、日々強くなるばかり。

7月のサッカーの試合で、日本人に対する重慶の人々の過剰な反発を、ここ10年の反日教育のせいと分析し、戦前から戦後に行った日本軍の行為に触れず、思いやりもせず、却って「文化程度……」などと卑下し、逆に日本人に中国への反感を買わせる、日本のマスコミや政府。戦争の現実を忘れ、知らせず、被害者の心を踏みつける日本の姿に、アメリカの傲慢な姿が、重なる。歴史の流れの大きなうねりを、苦勞して逆に泳ぎ、源にたどり着くことが大切なのに、今眼前の荒波を見て、非難することに終始しているように見える日本。これが、この1年去ることの無い不安だ。

イラクの問題でもない、アメリカの問題でもない、日本が危ない。日本の前歴と、優柔不断な国民性が、不安だ。日本には、マイケル・ムーアはいないもの……。

中国に行くのは、現実を知りたいから。日本では美化され、歪曲され、忘れられた戦争の現実は、そのときの人々の恐れ、疑問、不合理、不正、それらは戦争賛美の中で、無視された。

戦争が引き起こす残忍さは、それが向けられた国に多く残される。イラクに、沖縄に、広島に、長崎に、中国に、そして日本が侵略したすべての国に。

だから中国に行かなければならない。中国の人々の嘆きを聞き、受け止めるしかない!

そんな漠然とした考えを持ち、勉強不足で参加した私にとって、高校生の井上さんの参加は、心強く、なんだか健気なジャンヌダルクのように見えた。こういう人が居てくれた、日本も捨てたも

んじゃないぞ！・・・でも、私には何も教えられないので、反省だけはしつつも、井上さんの専属トレーナーのような宮内さんに着かず離れず、私も耳を傾ける。

人々の声を聞く事。5年前の訪中の時は、すごかった。バスで7時間の往復で、新圭社村を訪ね性の奴隷とされた方の話を伺った。夜行で移動した。そこでは常に中国の普通の人々の戦争被害の話が聞けた。ショックの連続だった。日本人がほんとに嫌になった。人間なんて弱く、反省せず、何度も過ちを繰り返すか。悪夢を見たし、男の身勝手さに夫まで疑いの目で見てしまった。戦争になったら誰もがしてしまいそうな残忍な行為。いや、だからこそ、戦争を起こしてはいけないのだ。そう考え直して、涙を流す幸存者の方の一言一言を受け止めようとした。

今回、行動することしかない私は、人とのふれあいを、大切にしかかった。南京で幸存者の伍さんのお話、目の前の自分に好意を持つ少女を助けられなかった人の苦しみは、60年以上たっても癒えていないと思う。上海の魯迅記念公園での、安順根記念館で日本人が見学に来たことに驚く案内人の女性。203高地の売店の日本語ガイド「韓行恕さん」は、母の父が日本人に殺されたのに、日本語で説明してくれた。強制的に教えられた日本語で。



水師営会見所の劉寛一さん

同じく水師営会見所の「劉寛一さん」も日本語を上手に使う方で、インテリであったようで、文革で苦勞されたらしい。時折やってくる戦争懐古の日本人にガイドすることは、生きる糧とはいえ複雑なものではないか。大連のガイド胡さんは英語で一生懸命戦争について説明してくれた。戦争を知ること大切にしている私たちの姿勢は大変素晴らしいが、日本の人はもっと知るべきではな

いかと、情熱的に説いていた。

旅行記というよりは、感想文になってしまいました。このきな臭い日本の2004年の夏に訪中できたことを感謝いたします。何か始めないと、この思いに駆られる、今日この頃です。



南京・旅順から 日中戦争と日本の位置について考える 小城 智子



南京大虐殺の跡地を訪ね、当時の証言を幸存者から聞き、南京大屠殺資料館に学ぶ旅も6回目を重ねてきた。いったい何があったのか、自分の目で確かめたい、という思いから、なぜこんな事になったのか、どうすれば再びこんな戦争を引き起こさずに平和を守れるのか、子ども達に何を伝えていくのか考える旅になっている。

南京大屠殺資料館は、2年間の間にまた変化し、証言してきた幸存者の足跡や姿の彫像があり、「狂雪」(王 久辛作 第1回魯迅賞受賞作)が壁に書かれている。おりしも李秀英さん(マギーの映像にあった女性)が病状悪化というニュースもあり、幸存者の思いを伝える、ということが考えられているように感じた。



伍正禧さん

幸存者伍正禧さん(82歳)14歳の時、南京

にいた。小さな店をしていたが、12月13日に、家でごはんを食べているときに、3人の日本兵が来た。白い腕章に赤い文字で中島(部隊)とあり、二人は銃、一人は剣とピストルを持っていた。「支那軍」と机の上に書いた。何をしに来たか分からなかった。銃を向け部屋の外に追い出した。兄といとこ3人おじがいた。裏通りから表の方に出された。ひもで、じゅずつなぎにされ、連行された。日本人護送兵が歩いてた。隣の人を連れて行かれた、ということで、母親が「帰ってきなさい。」と言ったのであわてて帰った。機関銃の銃声が聞こえた。どこかで戦闘があったようだった。

その後難民区に行っていた。難民区のそばの川に行くと、地面一面が人間の死体で被われていた。川の水が赤く染まっていた。家族の5人がつれていかれたままだったので、うつぶせの人間の死体を確認しようとしたが、じゅずつなぎに殺されていたので、ひっくり返すのに大変だった。日本兵が来たというので、家に帰った。前の家に火を付けられて燃え上がっていると祖母が聞き、米や粉を取りに行け、と言われた。日が暮れていたのに、祖父が明日でいい、と言う。中国人が外に出て行くには、帽子を外し、白い生地の日丸を書かないと危ないといわれた。翌朝大人に紛れ込んで食料を取りにいった。周りの家も炎上していた。人間の足の部分が出ているので、煉瓦作りの家で煉瓦は熱かったが、木でかきわけて引き出すと、門番のおじいさんと、遺体を置く場所を創っていたので、卍会で埋葬された。

回民族(少数民族)で、南京でも多くない。部落に集まって暮らしてきた。大家族で、母、あによめ、妹、おばさんと女子大(金陵師範大学)の外にテントを張って暮らしていた。女子大の中の人は給食があったが、外のものにはおかゆなど無かった。が、子どもなのでもぐりこんでもらったりした。

日本兵が来て、祖母の手首をつかみ、「女はどこにいるか」といい、剣で右腕を斬りつけた。綿入れを着ていたので幸い骨までは行かなかった。日本兵は去っていったので、祖母を支えて中に入れた。10分足らずで日本兵がもどってきた。裏の寝室からうめき声が聞こえてきた。見に行くと、祖父があおむけになって倒れ、口から血が出てきていた。祖母があわてて「誰か呼んでください。」といわれた。日本軍に銃剣で刺された跡があり、傷口から血が流れ出ていた。布団の綿を傷口に当てて血を抑えた。鼓楼病院に運ぼうとしたが、日本軍に占領され無理、と言われる。9時頃亡く

なった。

翌年1月頃もとの家にもどった。治安維持会という取り締まりをする組織ができた。店も掃除をして、木材で家も繕った。卵、落花生、酒、たばこなどを売る小さい商売を始めた。

チョウという若い女の子が米を買いに来た。お金を持ってきてないから、と袋だけ預かった所へ、日本兵がやってきた。「クーニャン、クーニャン」と追いかけられ、逃げる女の子を裏からかくし棒で支え鍵をかけた。ドンドンドアをたたかれ、木製のドアに叩きつけられ、何も分からなくなってしまった。肛門の上あたりに痛みを感じた。気が付いたときはベッドの上で、「良かった」という母の声があった。その後も用足しが一人ではできなかった。女の子は、日本兵に乱暴され、首をつって自殺したと母に教えられた。

連れ出された5人も帰ってこなかった。あによめは一人で生きてきた。

今回の中国訪問で学んだこと

1、旅順事件、旅順虐殺について



萬忠墓

日清戦争時にこのような虐殺事件があったことについて、日本ではほとんど知られていないのではない。高校の日本史Bの教科書でも取り上げているのは、実教出版1社だけという。(参考「旅順虐殺事件」井上春樹 筑摩書房) 虐殺された住民は中国側は1万8000人という数を上げている。1軒1軒まわり3人4人と引き出し殺していった、と世界に報道され、世界の人々は衝撃を受けた。しかし、日本政府は虐殺の事実を認知しつつも、虐殺当事者や指揮官の処罰はせず、戦闘中のできごとだと強弁した。南京大虐殺と同じ事が、1894年11月21日～24日の間に起こった。その前の11月17日から旅順に行き着くまでの途中の村でも三光作戦が行われていた。国民はは

つきり知らされていないし、当時の人権感覚の中で、諸外国が何を問題にしているか、つかんでいなかった。日本政府の戦勝報道に乘せられている間に、外国や中国では"日本人の残虐性野蛮性"と失望されていた。陸奥宗光は外国人記者から聞き事実を知ったが、否定し、やり過ごし、ほとぼりが冷めるのを待った。しかも外国報道機関を買収し、別情報を流させた。

なぜこんな虐殺が起こったのか、調べていくと、旅順と南京には共通していることも多い。戦争の理由に正当性というか正義が余りにもない。司令部も兵士ももっと早く解決すると考えていた。思わぬ抵抗にあい、仲間の死に対する報復気分になった。兵士の心がすさんでいるのに、上官も、陥落後の虐殺や略奪をとめていない。山地元治中將は、「婦女老幼以外すべて殺害してかまわぬ。」と兵士に言っている。国民の意識としても、国際的な捕虜や住民への保護という人権感覚は育っていない。従軍記者が、剣を抜き試し切りしたりしている。外国人記者にとって、自分の宿泊しているホテルの従業員まで惨殺される等の占領後の虐殺や略奪は許されず、日本人は野蛮、という印象を強く持たせた。しかも政府が国民には真実を伝えていない。やられたからやり返した、戦争にはこの程度はつきもの、といった報道である。ただ、国際的には条約改正の問題もあり、もみ消しに走っている。

2、日清・日露戦争をどうとらえるか

私たちは、日清戦争では、勝つと思わなかったのに清に勝ち、法外な賠償金を得てこの後の日本の資本主義の発展の礎を築いた、その後の不当な三国干渉に対し臥薪嘗胆を合い言葉に耐えてきて、10年後の日露戦争にも、英国の支持も取り付けながら大国ロシアにも勝ち、日本も帝国列強仲間入りしようとしてきた。…といった学習をしてきた。その後の日中戦争にしても、しかたなくひきずりこまれた戦争と言う見方も重なっている。しかし、実際には、策略と陰謀で仕掛けて領土拡張を狙ってきた意図的な戦争であり、侵略された人々にとっては許されない戦争である。

中国や韓国朝鮮では、日清戦争ではなく、甲午戦争・東学農民戦争と言われ、日中戦争の始まりととらえている。中国では、甲午戦争を大きな転換点として、ここから50年間を、日本の侵略に苦しめられ反日戦争を闘ってきた民族の受難の歴史として、国の強化を目指してきた。

日本にとっては、ここから戦争をする国へ、戦争で経済発展を支える仕組みに転がっていった。

また、思想的な意味でも、大きな転換点である。それまでの中国に対する文化を伝えられた親しみのある大国イメージから、"弱小国"中国人蔑視の思想が子ども達まで広げられた。南京大虐殺等この後の虐殺事件を引き起こす素地ともなった。

3、万忠墓の状況と変遷

1894年旅順市で36人しか生き残らなかったという惨状の後、日本軍は清国軍兵士や住民の遺体を白玉山に集めて、船の廢材に油をかけて焼いた。その後に土をかけ、木の「清国兵戦没者の碑」を立てた。

1896年清国政府は顧元勳書「萬忠墓」という石碑を建てた。

1905年以降はまた日本政府が支配。乃木町一丁目となったが、中国人達の毎年の慰霊祭に危機感を感じて、深夜に石碑を盗み出させた。単なる塚だけになり、その後は荒れはてていたが、1922年旅順華商公議會會長陶旭亭が、清国軍人孟魁三とともに、萬忠墓改修募金運動を始め、二つの部屋を持つ瓦葺きの拝殿を造った。石碑も創ったが、上部に四明公所と書いたところ旅順警察が認めず、セメントで塗りつぶさせた。

満州事変前後から日本は高圧的になり、萬忠墓破壊を企てたりした。まわりに有刺鉄線をはりめぐらし、日本人所有者村上某は枯れ草を積み上げ覆い隠していた。遺族に萬忠墓移転を申請させ、軍部が指示していたが、抗議にあい、うやむやになった。

解放後国民党政府になった1946年10月25日第1回萬忠墓祭祀活動と補修工事があった。

1948年萬忠墓改修の動きがあり、日本人技術者の設計によるもので、日本式の墓になった。また盗まれた初代萬忠墓石碑は1939年病院の改修工事の際に見つけられていたので、戦後取り戻され、三つの石碑を並べた。

1959年演劇萬忠墓が、152回公演され、18万人が見た。

1963年省級文物保護單位（文化財）

1971年墓の後方に展示室設置 陸奥宗光写真と「賽賽録」も展示

1994年甲午戦争100年全面改修のため初めて発掘調査、人骨、木材炭、銅製品や鉄製品など船の金具発見される。現在の資料館の基礎になっている。今大連では、小中学校9年間のうちに1回は来る、という教育施設になっている。しかし、日本人には公開していない、ということで、私たちは特別に見た形になった。

4、大連の街

満鉄本社や日本人街は、日露戦争のあとの貧しくなった人々が一攫千金を夢見てやってきて、中国人を追い出して住みだしたところである。大連の人々もあまり日本人により感じは持っていないと言われる。しかし、今は日系企業が入り、約3000人の日本人が住んでいるという。

在日中国人の知人が連れてきてくれた武道の先生から、教えにいく陸軍大学が、昔日本軍の陸軍病院か何かで、そこにも1万人位の方の遺骨の見つかった万人坑がある、と言われる。731部隊とつながりがあった、と言われた。本当にあちこちに戦争の傷跡を見る。



大連市内の旧満鉄幹部らの住宅街

5、中国やアジアの国にとっての日本

日清、日露戦争直後、あの大国ロシアに勝った日本としてアジアの国々から期待されていた。しかし、その後の日本はアジアの一員としてではなく、脱亜入欧を掲げ、植民地支配をめざし、期待を裏切ってきた。その後の朝鮮や中国にしてきたことで、日本への評価は固まっていた。

今中国では反日の声も強まっている。1980年代は日本経済も上向きだった。あの敗戦の後ここまで復興した日本、経済大国としての日本にあこがれのような物もあった、と語られる。1985年前後からの教科書問題はあったが、まだ日本への評価は高かった。しかし今1990年代から日本にたいし批判的な評価が強まっている。靖国問題や政府要人の発言が歴史を全く認識していない、経済的にももう目標ではない、と言われた。日本は今また曲がり角にいる。アジアの一員としての日本と、アジアに敵対する日本。どちらを選ぶのかまた問われている、と改めて思った旅だった。

●●

第7回訪中団に参加して 石橋 賢一



足裏マッサージ

私は労働組合に参加して、20余年間反戦平和の運動に携わってきました。憲法に関する論議は、以前からなされていますが、最近9条改正に関する動きが、急速に進んでいます。憲法9条が改悪されると、世界中が血と血を洗うような悲惨な戦争が繰り返されるのではないのでしょうか。すべての人たちは、戦争のない平和な世界を望んでいると思います。今回、門永さんの勧めで、日本軍がかつて侵略した中国に行ってみないかと、声をかけていただきました。どこで、どんな悲惨なことがあったかを、自分の目で確かめ、反戦平和運動に、過去の現実を多くの人々に伝える思いで、参加しました。

8月15日の南京大虐殺記念館で行われた追悼集会は、戦没者を追悼して、日中友好を強めました。全世界各国の人民と共に、戦争のない平和な世界を維持することを確認する集会であったと思います。

資料展示館や遺骨陳列館には、日本軍が犯した残虐行為などの事実が写真や証言文が展示され、また、遺骨が掘り起こされたままの展示があり、侵略戦争の衝撃的な現実を目にしたときは、言葉がありませんでした。また、南京市内の集団虐殺地を見学したとき、中山埠頭では、ガイド載さんが逃げ場を失った人々が最後の望みをかけ、揚子江を渡る船を求めてたどりついたが、虐殺されたとの説明を受けると、胸がつまる思いになりました。そして、旅順フィールドワークでも、侵略戦争の戦跡や施設を見るたびに、日本軍のやってきたことが、いかに残虐な、人間を人間と思わない虐殺行為だったか、資料館の展示を見て、現実を

知ると、なんと「むごい」ことをしていたのだらうと怒りがこみ上げてきました。

今回の訪中はとても考えさせられ、命の尊さを感じさせてくれた、旅になりました。二度と悲惨な侵略戦争を起こさないためにも、歴史から見聞きたことを若い世代の人たちに、伝えていかなくてはならないと思います。

最後になりましたが、九日間、団長さん、秘書長さん、団員の皆さん、勉強になる中国の旅、有り難うございました。

●● 訪中の感想 門永三枝子



大連・旧大和ホテルで福西さん（右）と

今回の旅行は、なんといっても旅順虐殺のことを詳しく学べたという点でとても有意義だった。すっかり忘れ去られた100年以上も前の事件が、他国他民族を侵略し結局すべてを失うという、その後の日本の進路を考える上で、出発となる象徴的な事件だったということが分かった。

満州を侵略の足がかりにしたときの言い分「20億の国費、10万の同胞の血であがなってロシアを駆逐した満州は、日本の生命線である」（満鉄副総裁松岡洋右）は有名な言葉だが、この数字は日露戦争のことを指している。日露戦争で遼東半島を租借することになった日本はその後関東州と名付け、侵略を本格化していく。

「勝った」とされる日露戦争から今年で100年。黎明期の日本が「やむにやまれず闘って、初めて有色人種が白色人種に勝った戦争」だと栄光をもって語られるが、実はやむにやまれぬどころか、周到に準備された戦争であったこと、つまり結果的に戦争の遠因となったのが旅順虐殺であったこ

とが分かった。日清戦争そのものも明治政府がむりやり開戦に持ち込んだものだったが、その最中に起こったこの恥ずべき事件が、諸外国では大々的に報道され、結果として遼東半島の返還というロシアの横やり＝三国干渉を容易にさせる下地になったという。しかし明治政府は責任者の処罰や事件の解明はうやむやにしたまま、「臥薪嘗胆」のスローガンのもと、ロシア憎しの世論作りをはかっていった。

味方の兵や民間人が侵略地の住民に殺されて、その復讐心から虐殺行為を行ったという旅順事件の詳しい経過を見ると、まさに1937年の南京や2004年4月イラクのファルージャと同じではないか。戦争が引き起こされる構図というのは、なんとよく似ていることだろう。「無謀で、愚かだった」と後で総括しても、現実には戦争が起こるときには、圧倒的な国民の支持を背景としている。このことは100年前も今も全く同じだ。

戦争を過去のこととしてとらえ返そうとしない空気は、日中双方にあるだろう。特に若い人の間に。わたしたちは被害の面からだけでなく、加害の面からあの戦争を検証し、そのことをもって、再び戦争への準備を進めるこの国の方向を何とか変えていきたいとつとめてきた。しかし今、改憲派は国会議員の84%、改憲賛成世論過半数というところまでできてしまっている。この十何年間か、数限りない集会、デモ、ビラまき、カンパ、署名、選挙……をくりかえしてきたにもかかわらず、である。どこがどう足りなかったかといえ、そのすべてに力不足だったのであり、負け続けて今がある。

ぬぐってもぬぐっても何をしてもしみ出てきて、澱のようにたまってしまった無力感。ここからなかなか抜け出せない。昨年、駅頭でビラを渡そうとしたとき、「おまえら消滅」と声をかけられたことがある。

我々の主張は消滅するのか？消滅していいのか？

今からは、そういう自分との闘いだとおもう。でなければきっと「あの無謀な、愚かな戦争だった」と同じ愚かな悔恨をするに違いない。今できることはきっとあるはずだ。再びブッシュを選ぼうとしているアメリカ国民を「愚かだ」と分かる人々が今はたくさんいるはずだから。歴史から学ばなければいけない。むずかしくそして限りなく大切だからこそ、学ばなければいけない。



「過去」を訪れて「未来」を考える旅 福島俊弘



大連・旧大和ホテルで

第7回神戸南京をむすぶ会訪中団で上海・南京・大連・旅順を歩いた。私たちが今回訪れたところを列記すると、こうなる。

上海淞滬抗戦記念館 梅園尹奉吉記念館（以上上海市）

旧南京神社 侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館 同普徳寺叢葬地記念碑 中華門 侵華日軍南京大屠殺遇難同胞東郊叢葬地 同燕子磯遇難同胞記念碑 同草鞋峡遇難同胞記念碑 同煤炭港遇難同胞記念碑 同中山埠頭遇難同胞記念碑 同挹江門遇難同胞記念碑（以上南京市）

旧関東州庁 旧高等法院 旧東本願寺 旧日本人街 旧満鉄病院 旧大和ホテル 旧大連警察署 旧朝鮮銀行 旧通信局 旧横浜正金銀行大連市店 旧中国銀行 旧東洋拓殖ビル 旧大連市役所 大連駅 大連港 旧満鉄本社（以上大連市）

東鶏山北保塁 旅順日俄監獄舊址 萬忠墓 203高地 水師營（以上旅順）

日本にこういった種類の場所や記念館は、沖縄や広島長崎などを除けばほとんどない。広い中国の中には、日本との負の関係を残す場所は数多い。近代史の涙である。

1937年8月13日、日本軍が上海を攻めはじめた日だ。3年前の2002年から正午にサイレンを鳴らして、大きな犠牲を出しこの戦いにたおれた人たちを追悼しているという。67年前の出来事を刻もうとしている。

この8月13日午後、私たちの団は大阪から2時間余りの上海空港に降りた。重い日に上海を歩き、この旅が始まった。

南京市郊外、燕子磯は長江・揚子江岸の風光明媚なところである。黄色いマンジュシャゲの蜜を求めて黒い服を着たアゲハが舞っていた。

南京は、上海から揚子江をさかのぼること約300キロメートルの内陸都市、1937年の11月までは中国の首都であった。300キロメートルも進んできても川幅が1キロメートル以上あり、日本で生活するものにとって想像しにくい大きさである。水量も多く、土色したその川の流れに逆らって進む貨物船が小さく見える。

とうとうと流れる川面に、夥しい数の死体と血で染まった赤い水が流れていく。それが、ここから見える風景だった、と想像すると足がふるえてくる。

南京で今回、7箇所の慰霊碑を巡り吊った。これらの碑に記された死者の数の合計は、143721人に上る。この人たちに家族がいる。親戚や友人がいる。傷つきたおれた人とその周りの人の、無念と怒りは時代を超えて継がれているのは当然のことである。



南京大屠殺中山埠頭記念碑

小泉首相は、靖国神社参拝を来年も続けて行う、と明言した。これに対して、私たちが中国に向かう前日、中国外務省の報道局長は次のコメントを出している、と新聞報道された。「日本の指導者が被害国民の正義の声を無視し、絶えず挑発的な発言をしていることに我々は不満であり、遺憾に思う」と。

こういう発言をくり返し聞いていると、「両国間のこの溝の大きさは、両国民の溝の大きさにつながりかねない。」と思ってしまう。しかしながら、何度かのこの種の旅に参加して、感じることもある。

確かに、歴史認識の大きな基本的な違いが存在しているようだ。中国の教育の中では、日中間の

この歴史を重要視してきちんと教えているようだ。これは、旅先で聞く質問に、ほぼ例外なしに「学んだ」と答えが帰ってくることからもわかる。一方で、日本では教科書記述の量や書きぶりという問題もさることながら、近現代史のウエイトが実際には低いという状況があり、ほとんど教えられていないのではないかと。つまり、日本人が歴史事実を知らない、という現実があるようにも思う。これを何とかして埋めなければならないだろう。大学受験と関わってくるややこしい問題でもある。

近現代史の問題は日中間の問題に限らないのはいうまでもないが、ここではこの問題に絞りたい。日中2国間での歴史認識違いが、まず出発点に横たわっていて、その上に、日本の一部政治家たちの発言が、中国政府の怒りをかう。「一部政治家」たちが歴史的事実を知らないというわけではないのだから、これは政治家としての判断がそういわせていると考えるのが適当なのだろう。しかし、アジアや世界の各国からこの見識が疑われるようなことがあるとしたら、世界の中で日本が尊敬されることはないであろう。

こんな現状が長く続いている現状で、たぶん重要なことは、民間交流の大切さであろう。なにごとでも、公的な関係は一番終わりの場合が多い。初めに作られる場合は、要注意だ。細い弱い管の中を流れる信頼という流れが行きつ戻りつしながら、その管がだんだん太くなり、やがて強く硬いものになる。これが、自然の流れでもある。だから民間が草の根状に広がり、やがては公を動かすという形ができれば、それが理想ではないか。もちろん、公的に完成すればおしまいというものでもないが。

帰国後、南京に行ってきたという私に、知人の中国人がこういった。「南京は中国で一番日本人を嫌っているところですよ」と。本当かどうかわからないけれど、中国人の中でそんなことが言われているということ自体に、とてもとても驚いてしまった。でも、変に納得もしてしまっていた。

神戸南京をむすぶ会の中国名は「神戸南京心連心」で、文字通り、心と心をつなぐ、という意味だ。心をつなぐ、心をむすぶ。非常に難しいことを求められているようにも思う。しかし、両国に横たわる溝を埋めて越えることは、アジアの中で尊敬にたる位置を得ていくためにも欠くことはできない。

「心連心」。この名前の示す心を考えていきたい。



神戸南京を結ぶ会第7次訪中団に参加して - 自分の立つ位置を見据えることから - 福西由紀子

1. 自分の立つ位置

8月15日の平和集会で、また翌日の燕子磯など、揚子江の虐殺現場のほとりで、私は「母は南京にきたのだろうか。」と考え始めていた。

7年前に83歳で亡くなった私の母は、戦前、日本赤十字社の従軍看護婦として、中国戦線の傷病兵を運ぶ輸送船に乗っていた。しかも、「上海から揚子江を遡った。」と聞いたことがある。揚子江を遡れば南京がある。

私が日本に帰ってから親族に聞くと、母が従軍看護婦になったのは、1936年だということがわかった。もしかすると、1937年の南京虐殺の後に南京に入った可能性もあるのではないかと。今は推測の域を出ないが、いずれにしても母が日本軍に連なる位置にいたということは事実である。今後、母と南京のことをもっと調べたいと思っている。

母は従軍看護婦の任を終え、旧「満州」に渡り、奉天（今の瀋陽）で1941年に父と結婚し、敗戦まで住んでいた。中国人のことを「満人」と呼んでいたと聞いたことがあった。しかし、残念ながら、両親から「戦前、中国の人たちに悪いことをした。」と聞いたことはなかった。両親は当時の日本人のほとんどがそうであったように、きっと無意識のうちに中国人を踏みつけにしていたのではないかと。踏まれた方は、その痛みを一生忘れないが、踏んだ方は踏んだこともわからず、また踏んだ痛さに思いを致さないばかりか、また同じ過ちを繰り返すこともある。

この旅に参加させてもらい、初めて私は自分の母が日本軍と連なる位置にいたこと、また両親が加害者の立場で旧「満州」で暮らしてきたことをきちんと見据えなければならないと思うようになった。加害者の立場の子どもであるという位置に自分が立っていることを原点にこの旅を振り返りたいと思う。

2. 南京

侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館のことは話に聞いたことがあり、一度訪れたいと思っていた所だった。見たもの一つ一つを心に焼き付けなければと思った。平和の鐘の「前事不忘後事之師」

と書かれたことば、300000という犠牲者の数、幸存者の人達の足型のレリーフと塑像。足型には名前と年齢がご本人の自筆で書かれていた。危篤だと言われている李秀英さんは83歳。被害を受けられてから、67年という長い年月をどのような苦悶のうちに過ごしてこられたか、と思わずにいられなかった。壁にはめ込まれた「狂雪」の詩。題名だけでも日本軍の蛮行に対する南京の人達の恐怖が伝わってくる。この詩の日本語訳も早く知りたいと思う。

そして、「日中両国学者・市民代表者南京和平集会」では、まず、日本人側からこの南京虐殺の犠牲者を追悼し、また戦争への道を進もうとすることを阻止しようとする決意が述べられた。中国側の人たちからは、日本が再び軍国主義化することへの懸念が述べられた。中国の人達が日本の政治の動向に敏感であることを痛感させられた。黙祷の時間は日本軍によって殺された人の苦しみに思いを馳せた。

記念館の中へ入って、階段を下りるとおびただしい数の石があり、これが虐殺で犠牲になった30万人の人達の分であるという。30万人という数の多さをこの石で実感した。虐殺された人たちの苦しみ、その遺族や、生き残った人たちの悲しみや怒り、心や体の傷の深さを思った。この石を取り囲むように虐殺現場の記念碑のレプリカや、数珠つなぎにして連行される中国人など、虐殺される様子を表したレリーフ、苦悶している人の顔や手の塑像などが置かれていた。これらも忘れることはできない。

展示館の中では、掘り出された遺体がそのまま見えるようになっている所があった。いわゆる「万人坑」の跡で、この中には幼な子のものもあり、日本軍が無差別に南京の人達を殺したことがありありとわかった。展示の写真は残虐なものばかりだった。ここまで人間は残虐になれるものなのか。日本人兵士はどんな気持ちでこの蛮行を繰り返したのだろう。中国の人達の恐怖におびえた顔、苦痛にゆがんだ顔に対し、日本人兵士の平然とした顔、薄ら笑いを浮かべた顔が対照的で、日本軍に対し言いしれぬ怒りを覚えた。

幸存者の伍正禧さんは、祖父を殺され、自分も傷つけられ、また、肉親が5人も連行されて帰ってこなかった苦しい経験を話してくださった。自分だけでなく、身近な人がたくさん傷つけられて、精神的にもどれだけたいへんな状況になったであろう。また、お兄さんは当時結婚していたが、戻ってこなかったため、お兄さんのつれあいさんは

生涯一人を通し、生まれた子供さんは父親を知らずに今も生きているという。このように、南京の人にとって南京虐殺の傷跡は未だに癒されてはいないことを改めて感じた。

南京市内では虐殺された人たちを埋葬している記念碑をたくさん訪れた。燕子磯、草鞋峡や、煤炭港、中山埠頭では揚子江のゆったりした流れを見ながら、当時の多くの人達が殺され、投げ込まれて真っ赤に染まった惨状を思い浮かべた。

また、南京神社跡にも行った。ここでは、神社に使われていた石が壊され、無造作に積み上げられていた。日本は戦前、アジアにいくつの神社をつくったのだろう。中国で買った本にも「新京神社」「上海神社」「台湾神社」「大連神社」などが載っていた。日本が戦前、侵略し、植民地にした現地の人々を皇国臣民化させることにいかに力を入れていたかをたを知ることができた。

3. 旅順

今回の旅行で、初めて旅順虐殺のことを知った。日清戦争ですでに日本軍は目を覆いたくなる虐殺を行い、2万人もの人を殺したというのは本当に驚きだった。そして、それは当時「世界を震撼させる事件」であったにもかかわらず、日本人には知らされなかったという。政府は責任の所在を明らかにせず、ひたすら、世界がこの事件を忘れるのを待ったそうだ。日本のこういう姿勢は残念ながら変わっていない。

萬忠墓は、4回も碑文が変わっているということで、日本と中国の歴史に翻弄されてきた。しかし、市民によって改修が行われたそうで、旅順虐殺を後世に伝えようとする市民の気持ち表れている。1994年に百年を記念して百年祭がとりおこなわれたそうだが、日本人にはあまり知られておらず、やはり、中国やアジアと日本の歴史認識の落差に愕然とした。萬忠墓記念館では、日本軍が遺体を焼く時に使用された燃料の遺物や亡くなった人の使っていた遺物等も展示されていた。百年たってこれらの遺物が掘り出されたそうだが、百年という年月を経ても見る者に虐殺の残酷さを伝えるのにあまりあるものだった。

旅順監獄は、安重根が捕らえられ、処刑された所で、ここも一度行きたい所の一つだった。彼の独房は思ったよりも大きく、彼が看守などから尊敬の念をもたれていたことの表れなのかとも思った。この建物は初めはロシアが建設し、後に日本が拡張したという。これら、建設、拡張に中国の人達が多く従事させられたのであろう。まず、入

って投獄された人達が着せられた服の色一つ見ても目立つ色にしていることがうかがわれた。そして監獄の中のつくりは強固で、壁は厚く、夏の暑さや冬の寒さを思った。全く日の射さない暗房、拷問室、7等級にわけられたご飯の量を量る容器など印象に残るものがあったが、最も衝撃的だったのは、絞刑室の中の様子と遺体を入れる木の桶だった。そしてこの桶がたくさん並んでいるのを掘り出した部屋の様子は今も強烈に印象に残っている。中国や朝鮮のために命を賭して活動した、安重根を初め始め多くの人たちの無念さを思った。

4. 今回感じたこと

＜知って伝えること＞

今回の旅で、いろいろなことを感じさせられたが、まず、「歴史の真実を知る」ことの大切さである。日本とアジアの歴史の中で、中国人を初め、アジアの人たちは当然のごとく知っているが、日本人は知らないことがまだまだ多く横たわっていると思う。とにかくそれらを知ることから始めなければならないだろう。そして、それらを自分の心に深く刻み、同じ過ちを繰り返さぬよう周りの人に伝えることだ。

＜前事不忘後事之師＞

このことばは南京の大屠殺遇難同胞紀念館の平和の鐘に書かれていたが、日本政府がこの考え方を持っていたら歴史はどれだけ変わっていたかと思う。過去の歴史に学ぶことをしなかったため、旅順虐殺を行い、南京虐殺を引き起こし、同じ過ちを繰り返し、多くの人たちを犠牲にしてしまった。それは中国だけにとどまらない。そして、戦後も謝罪と補償をせず、アジアの人々を苦しめ続けている。日本国内では、「南京虐殺はなかった。」とか、「30万人も殺していない。」などという発言を許してしまっているし、政府は自衛隊をイラクに送り出し、憲法改正をもくろみ、戦争への道を歩もうとしている。このまま行けば、アジアの中で日本は孤立してしまうのではないか。私たちはもっと「過去の歴史に学び未来を見据えること」を多くの人に訴えていかなければならないと思う。

＜戦争というもの＞

『南京戦 閉ざれた記憶を訪ねて 元兵士102人の証言』の中に、ごく普通の日本人が虐殺を行ってしまう話がたくさん出てくる。たとえば、「父の後を継いで鍛冶屋4代目だった。」という人が「機関銃中隊」に入り、揚子江の河岸上からので500人の中国人の捕虜を撃ったという。多くの人達もそうであろう。平和な時はよき社会人で

あった人が戦争では、平気で人殺しができるようにさせられていく。そして、虐殺を行った人たちの多くは、自分のしたことが「当時はしかたなかったのだ。」とか「悪いこととは思っていない。」というふうに考えている。反省の気持ちがあまりないことに愕然とさせられる。

今年、アメリカ軍がイラクのアグレブ刑務所でイラク人の収容者に虐待を行っていた事実が明らかになった。先日テレビでこの件に関する特集番組を見た。その中で、虐待に関与した兵士（女性兵士も）は「上司からの命令でやっただけで自分は悪くない」と言っていた。まさに南京虐殺と構造は同じだ。戦争がある限り、殺す側の論理は自分が「正しい」であり、殺される側は人として扱われず無惨に犠牲を強いられるのだ。

＜自分にできること＞

世の中を変えることは難しい。しかし、一人の「心ある人」の気持ちや行動は、周りの人の心を動かし、その人を変えていく力になる。この旅で、私は「心ある人」や、その影響を受け、「心ある人」になっていった人とたくさん出会うことができた。そうして一人一人の人間が変わっていくことで、世の中は少しずつ変わっていくと信じたい。私も「心ある人」に心を動かされた一人として、その人たちの列の端に加われたら嬉しく思う。今回の旅で見たこと聞いたこと、感じたこと考えたことを、まず、戦争のために学ぶことができなかった生徒さんのたくさんいる夜間中学で伝えていきたい。自分の立つ位置を見据えながら。

「鬼を拝む」ということ

- - はじめて中国を旅して - -

和田喜太郎

一度は中国に行ってみたいと思っていた。機会を得て「神戸・南京をむすぶ会」の第7回訪中団＜上海・南京・大連・旅順フィールドワーク＞に便乗参加した。

敗戦記念日を挟み9日間の旅で一行は20人。学校の先生方が多かったようで、行く先々で熱心にノートするなどいずれも勉強家だった。

特に今回は、＜知られざる旅順虐殺＞がテーマとされ事前に学習会も行われた。日清戦争の際、日本軍は無辜の民衆を大量虐殺し、欧米では「人間の皮を被った獣の非道行為」と非難し、当時神戸在住のラフカディオ・ハーンも論難した。しか

しこのことは日本ではほとんど知らされず、その関係資料も乏しい。



魯迅公園の魯迅像

上海では魯迅記念館など見学。翌8月15日は大阪の松岡環さんらの訪中グループと合流し、南京虐殺記念館前で中日合同の平和集会が行われた。そのあと同館で南京虐殺の目撃生存者の話を聞き、翌日は虐殺埋葬地の慰霊碑を訪れ、献花など行った。

●事実の隠蔽

魯迅や孫文の記念館も訪れたが、日本軍の虐殺・犠牲になった人々の慰霊記念碑をいくつか訪れた。断崖絶壁から長江に難を逃れようとして殺戮され、河は血の色に染まったという南京虐殺の現場墓碑銘の説明を聞き、ただただ痛恨極まる思いだった。

訪問地で中国の中学・高校生らの一団と出会うこともあった。中国もまた戦争を知らない世代が主流となり、戦争体験者は極わずかになった。だから歴史学習にも力をいれく学習基地>として現場を見ることを奨励しているようである。

とかく人間は忘れっぽい。過去の事実や不都合なことをく水に流し>隠蔽してしまうようではその民族に希望はない。人間の誇りと尊厳を持て、屈辱の歴史を未来へのバネにしようということであろうか。

侵略を「進攻」と言い換え、「南京虐殺はなかった」から「いや30万人もなかった」など、今だに侵略擁護論がはびこっているのが日本の現状である。事実を事実として率直に認めようせず、隠し通せるものなら通したい、と言う隠蔽体質は、今日でも政府権力や大企業にも引き継がれている。

南京虐殺が30万人もなかったかも知れないが各所慰霊碑を観ながら、やっぱりあったのかも知れないと思った。決定的な証拠の有無が論争の種

だが、日本は敗戦時、軍部や政府・公共機関は都合の悪い資料は全部焼却処分した経緯がある。そんな責任逃れの風景がどこでもあった。聖戦・正義の戦争を主張するならそんな必要はなかったはずである。

●鬼を拝む

南京虐殺記念館前集会は暑い真っ盛りだった。ここで松岡環さんは、中国側からく元日本兵聞き書き記録>の労作に対する感謝状が渡された。集会は大集会というわけではなく日中双方百人ほどだった。

しかし翌日、街頭で売られていた数種の新聞(日本の夕刊紙のようなローカル紙で日刊や週刊様々)には、カラー写真つきトップで私たちのことを報道していた。中国語は読めないが写真と見出しくらいは分かる。そのすぐ横に日本政府の閣僚が靖国参拝したことをく拝鬼>の見出しで伝えていた。



2004.8.16 南京「現代快报」

日本軍題材の「リーベンクイザー鬼の子」や「鬼が来た」という映画もあったが、奪い、犯し、殺し尽くす日本兵はまさに鬼であった。その鬼の親玉A級戦犯を祀っているのが靖国神社である。日本の夕刊紙は政治問題をそれほど取り上げないが、中国では日本の政治動向に敏感なようで、前日のことはたちまち民衆に知れわたる。国家体制の違いもあるが、政府広報化した独占メディアに毒されたのか、のんびりムードの日本との違いがある。

小泉首相は、違法判決にもかかわらず、あくまで靖国参拝を続けると開き直るが、ひとり小泉の問題でなく、それに居並ぶ閣僚がおり、野党議員を含むく参拝議連>などの存在は日本の政治姿勢を示すものであり、中国が中日友好の将来に重大な懸念を示して当然のことであろう。

かつての<無差別爆撃>の重慶で日中サッカー試合を巡る摩擦が起きた。保守派は「反日教育のせい」としたが、小泉靖国参拝の報道が少なからず影響しており、これで中国が歴史教育を放棄するわけではないだろう。

●侵略の入口・大連

上海・南京のあと大連、旅順を訪れた。大連の街作りは帝政ロシアが手掛け、最新の監獄（旅順）も建設した。それを日本が「満州国」認知のため補強した形といえる。大和ホテル、満鉄本社その他の建物はそのまま使われ、満鉄社宅街も住人が代わっただけで、かつてそこは「満人」禁足の地だった。

大連港を見渡すビルの屋上に立つと、満州へ満州へと、軍隊や移民の群れが上陸し、そして引き揚げていったのか、と思うと言いやうのない思いに迫られた。



しつこい誘いに会を代表して応じて 203 高地に上る

旅順は要塞跡を生々しく残した観光と新興住宅の都市と言った感じだった。日露戦争203高地や慰霊塔、水師営会見場も「満州」時代から、戦後の「文革」時代でも壊されず残され、懐古趣味の日本人向きだった。

帝政ロシアは大連・旅順など不凍港確保のため南下政策をとり、日本とロシアの侵略者同士が激突したのが、日清戦争に続く日露戦争であった。日本は世界最大の陸軍国ロシアを破ったが、帝政ロシアの奢りと国内革命騒動が利して日本は辛うじて「勝利」したに過ぎない。これらは確かに被植民地國の刺激とはなったが結果論であり、戦争正当化の理由にならず<大東亜戦争>肯定論に共通する。

日露戦争は日本存亡をかけた<防衛戦争>論がある。司馬遼太郎はこの説をとり、そのあとの慢心がいけなかったとする。明治政府以後の<富国強兵>政策は必然的に軍部台頭を許し、あげくの果ての泥沼戦争だった。

資本の進出は否定しようもないが、邦人保護や権益擁護など何かにつけ口実をつけ、軍隊を派遣するのが侵略者の常套手段である。関東軍もかつては南満州鉄道の警備隊に過ぎなかったが、事件をでっち上げるごとに増強し、<統帥権>をも無視して傀儡政権をつくるまでに至り、政府はそれを追認のみであった。その満州国を認めよとして拒否され、国際連盟を脱退し日本は日中戦争から、物資確保の太平洋戦争へと走り続けることになる。

●軍歌と「満州」

小学校に入学した年「支那事変」が勃発、本格的な侵略戦争が始まり「南京陥落」で日本は沸いた。高等科二年卒業の年に日本は敗戦したが、それまで中国のことは何も知らず「満蒙開拓義勇軍」を志したこともあった。考えてみると、どこの國でもない広い原野などありえなかった。中国人や朝鮮人の既墾地を「買い上げ」と称し収奪し、移民に分け与えただけだった。その移民も関東軍に見捨てられて苦難の道を歩み、やっと帰国を果たした<残留孤児>の今は、生活の保証もなく各地で集団訴訟が起きている。

軍歌「討匪行」は抗日ゲリラ掃討・弾圧の歌だった。<王道楽土><五族共和>は見せかけで事実は違っていた。戦後、スメードレーやエドガースノーらのルポルタージュで初めて真実を知った。私の一級下以下は教科書に墨を塗り不都合を消したが軍国教育の事実は消すことはできない。

日露戦争は教科書にもあったが広瀬中佐の歌、乃木大将水師営会見の歌、東郷元帥日本海海戦の歌など今も頭にこびりついている。そして、<赤い夕日の満州>の「戦友」の歌や、<歩兵決起せよ>の「歩兵の本領」の歌など、今の自衛隊でも愛唱歌として受けつがれ歌われているという。

朝鮮半島を手中にし、その先の「満州」、果ては太平洋南方で父祖たちは確かに多くの血を流したが、あれはほんとに必要な戦争であったのか、明治以後に立ち返り改めて考えざるをえない。

<証言> 侵華日軍南京大屠殺幸存者 伍正禧さん (記録・井上静香)



伍正禧さん

みなさん、暑い中どうもこの南京に来ていただきありがとうございます。今日は私の戦争時にあった事件の体験について、思い出しながら話をしたいと思います。私の名前は 伍正禧 (ウージェンシー) といいます。今年82歳です。私が14歳の時に南京の事件が起こりました。難民区という辺りで起こったことを今からお話します。

その時私たちは、個人商店を営んでいました。例えば麺を売ったり包子を売ったりするような商売を、みんな営んでいました。1937年、私たちが商売をしていた町で「華幸」という地名がありまして、そこで事件が起きたわけですが、それは免れることが出来なかったというふうに記憶しています。私たちが住んでいる周りは、領事館や大使館、当時外国の機関が多くありました。私たちはテントを張って商売をしていました。12月13日、私たちが丁度家で御飯を食べているところに3人の日本人がやってきて、彼らは白地に赤い字で「中島」という文字の入った腕章をつけていました。中島部隊が家にやってきました。2人は銃を持っていて、1人は剣とピストルを持ってやってきました。丁度、御飯を食べている時だったので、机の上に彼らは3文字の字を書きました。その字は「支那軍」と書いてありました。私たちはその字がどういう意味かわかりませんでした。中国人の部隊、中国と協力している部隊だと思っていて、何しに來たのかもわかりませんでした。3人は1、2分くらい打ち合わせをしていま

したが、私たちは全然何を言っているのかわかりませんでした。それから、銃などで脅して私たちを外に出しました。

その時5人、自分のお兄さんと3人の従兄弟にあたるお兄さんとおじさんがいました。住んでいたのは表の通りではなく裏通りで、家から表の方に出され彼らはそれを見ていました。中国人は紐で数珠繋ぎにされたまま寝転がり、その両側に5、6人の日本兵、護送兵が監視目的で一緒に歩いていました。とても長い間歩き、今まで住んでいたところが全然見えないところに連れていかれました。お母さんが私に帰ってきなさいと、そうでなければ連れて行かれるといいました。みんな自分の身内が連れて行かれるということで、探していたという記憶です。

翌日の朝方、近所の人たちが三々五々で夕べ起きたことを話し合っていました。私はまだ小さかったのですが、話だけを聞きました。夕べは機関銃の音が絶えず聞こえていたと、戦闘でも起きたのではないかと言っていました。その後もいろいろな情報が飛び交っていて、山や山のふもとに死体がびっしりと集まって、池や川のほうにもいっぱい人間の死体が浮かんでいるという話でした。当時、まだ14歳で幼く、そんなに背も高くないので自由に出入りができる状態でした。事件の発生した翌日、いろいろな情報を聞いたのでどういう事態、どういう状況なのか自分の目で見たいと思ったので、国際難民区、要するに避難していた家ですが、そこから少し外れた「古老」というところの近くに、現在は「南京市第一中学校」というのがあり、その近くにひとつの池「齒家池」がありまして、その池一面人間の死体で覆われていました。人間の死体が一面にあって、川の水が赤く染まっていました。家族のうち、兄一人、従兄弟三人、おじ一人、5人が何処に連れて行かれたのか、生きているのかどうかの確認をかねて、池にうつ伏せになっている人間の遺体を確認したいという思いでひっくり返そうとしたところ、人間は全て手を後ろに縛られ膝まづいた形で数珠繋ぎにされたまま死んでいました。今振り返ってみると、池の方にうつ伏せになっていたの、ひっくり返していくにはなかなかの力仕事でした。勇気のある少年時代だったということです。頭の部分だけをうちの親戚かどうかひっくり返して確認しました。かなりの

遺体を確認したところ親戚らしい人は一人もいませんでした。その時、近くに日本兵がよく巡察しており、恐いので家に引き返しました。家に帰ったところおばあさんから、今まで住んでいた家の方が日本兵に火をつけられ炎上していることを聞きました。難民区の生活は食糧不足で援助を受けていることもあって、米でもメリケン粉でも取りに来なさいということ言われました。もう日が暮れてきて出て行く勇気もなかったのも、「なら明日でもいい。」とおじいさんからいわれました。



侵華日軍南京大虐殺遇難同胞紀念館前の像

当時の情勢では、中国人が表へ出るにはまず脱帽をしなければならず、腕章に日の丸が描かれていないと出かけるにはちょっと危険でした。それに、一人一人ではダメでかたまて動かなければ危険性が高いという状態でした。さっきの話でも出ましたが、夕方暗くなりだしたので明日でもいいとおじいさんから言われまして、翌日の朝ようやく5、6人の年配の人たちと集まって、その年配の人々の中に私も紛れ込んで、商売していたもとの家の方に行きました。食料をとりに行くということで、炎上していたという情報も覚えながら近づいてみたところ、本当に自分の家どころかその周りの家も全部炎上していたその跡が目に入りました。

それから、自分の家のところまで近づいてみると、人間の足の部分が見えていました。レンガ造りの家でありました。うだつ等は倒されていて、人間の足を見に行ったところどういふものか掻き分けようと作業をしたところレンガはまだ熱いままでした。レンガがそのまま熱いものですから木の棒を持ってきて掻き分け、足の出ている人間を引っ張り出して確認したところ、門番をしていたおじいさんでした。頭部は焼け爛れていて目にあまる悲惨な状況でした。その亡くなった門番のおじいさんの遺体を置く場所を作り、人間の遺体は固くなっていますからレンガ

を頭と足の部分に置きちょっと高くしました。卍会、赤十字会によって埋葬されました。商売をしていた家の門番をしていていたおじいさんで姜(?)という名前の人でした。本来、亡くなった人たちを納めるのは柩やお棺ですが当時の状況ではなかなか作れないので、赤十字会の埋葬チームが来るのを待つしかありませんでした。そして、家に帰って見て来たことをお母さんに報告しました。おじいさんは商売人で亡くなった門番の人は82歳でした。彼に店先に来てもらっていたので、すまない気持ちで泣いていました。



記念館の朱成山館長

私は少数民族の回族です。当時、回民族はそんなに多くなく、出来るだけ集まって生活するという風習でした。今でもそうです。そのため大家族で、うち5人は日本兵に連れて行かれ残りの十数人、お母さんとその兄弟、兄嫁と妹とおばさん、当時の女子大学(南京師範大学)の方の国際難民区のなかにいました。外国人が管理している外側に前はいましたが、今度は内側にお母さんたちは入り込みました。要するに国際難民区の範囲は広いもので、南京師範大学は国際難民区の中にありました。私とおばさんがテント生活しているところは同じ難民区ですが、師範大学の向こう側にありました。師範大学の内側は国際安全区で外側はまだ別部分でした。

全てが難民区ですが、テント生活をしているころはお金や求職がありませんでした。師範大学の方に入れば外国人からの求職や、バイトがありました。記憶の中で、大学のキャンパスの中に入っておかゆをもらって出てきたというのを覚えています。何故自由に出入りできたかという、まだ幼い子供に対しては治安の規則が甘いためでした。以前商売をしていた家は全壊し、商売は中止になりました。難民区に入り、今度入ったところというのが南京師範大学の向こう側でした。そこで、商売を続けていたと

記憶しています。南京師範大学では、女性は難民区の中で暮らし男は昼間商売をしていました。布団を干す仕事の作業の時、一人の日本兵が現れました。そして、気がついたらその日本兵が私たちの前に立っていました。いきなり現れた日本兵は、まずおばあさんの手首を掴み「女（花姑娘）はいるか？」と尋ねられました。おばあさんはいきなり掴まれ震えていました。日本兵の質問にどう答えたらよいかと思っていると、剣を取り出しおばあさんの右腕に叩きつけました。冬場で綿入れを着ていたので骨までは傷ついていませんでした。おばあさんはまだ纏足で、日本兵は押し倒しうめいているおばあさんを軍用の靴で蹴飛ばし、その場を去っていきました。当時14歳だった自分のどこに力があつたのか、おばあさんを抱えました。怪我はそんなにありませんでしたが痛いと言っていました。おばあさんを支え落ち着かせて、日本兵が来ないかと心配して窓からのぞいていました。10分くらいしてまた戻ってきました。隠れていたので見つかりませんでした。裏の寝室でうめき声が聞こえました。その人はおじいさんで、口から血が出て、地面も血だらけでした。おばあさんが這いながら近づいてきて、「誰か助けを呼んできて」と言いました。お父さんおじさんが来て確かめてみると、身体中銃剣で刺された痕がたくさんあり病院に運ぼうとしましたが、日本兵に侵略されているという噂で行くことが出来ませんでした。そして、夕方7時ごろ亡くなってしまいました。

翌年、正月以降の話になります。火事になった店のほうに来て掃除もして、店が開けるようにしました。落花生、煙草、酒、小さな商売を再開しました。顧客に日本人は多く、日本兵はよく買い物に来ていました。商売を再開してからしばらく経った時、私に好意をもっているらしい女の子が米を買いに来ました。お金も持たず入れ物の袋だけを持ってやって来ました。私たちがやりとりをしているところに日本兵が来たので女の子は逃げました。その14、5歳の女の子はこの周りに住んでいますから、巷の地理は詳しいです。しかし、日本兵は大人なので逃げ

るのに失敗しました。なので、私はその子に「ここに隠れてください」と言いました。その言うとおりに女の子は入ってきました。ドアを裏から棒で支えて鍵をかけていました。当時のドアは木製で、私は髪を掴まれそのドアに叩きつけられ意識がなくなりました。目が覚め気が付いたらベッドの上でした。目が覚めてよかったという声が聞こえました。そして、女の子のことを訊くと首を吊って死んだとお母さんが言いました。多分日本兵に辱めを受けたのかもしれないということでした。連れて行かれた5人はそのまま消息不明で、もう帰りはしません。自分の目にしたこと近所の人々の証言をはっきりと覚えています。兄は2人のうち1人は結婚していました。連れて行かれ帰ってこないその兄の妻は、夫を1人しか選択しないという風習に従い今でも独身です。

確かに、私が見たことを皆さんにお伝えしました。
(2004年8月15日 於：侵華日軍南京大虐殺
遇難同胞記念館)



旧南京神社跡



「昭和」の文字が消されている

2004. 9. 22 神戸新聞

◆旅順虐殺 過去の「事実」学び 真摯に



今夏、中国の上海・南京・大連・旅順に日本軍の侵略の足跡を訪ねるフィールドワークに20人で出かけた。「神戸・南京をむすぶ会」主催のもので今年が7回目となる。毎年南京大虐殺の現場と、もう1カ所を訪ねることにしている。

今年は、日清戦争時の日本軍による「旅順虐殺」をもうひとつのテーマとして旅順・大連を訪問した。この旅順虐殺については、加藤周一氏が1988年8月23日付本紙夕刊の「夕陽爰

ひだ 飛田 雄一 神戸学生青年センター館長

語「欄」『南京』さかのぼって「旅順」で触れている。戦闘が終了したのちに、旅順と南京で民間人に対する虐殺が行われたが、加藤氏は、この二つの事件は、海外でよく知られた事件だが、日本政府が日本人に知らせようとせず、責任の所在を明らかにしようとしなかったことが共通している」と述べ、旅順虐殺が南京大虐殺につながったとしている。

また神戸時代のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）も「神戸クロニクル」（1894年12月7日付）紙上で「日本軍の行為はなんの言い訳も受け入れられないであろう。（中略）婦人、子供や非戦闘員に対する不必要な残虐行為については、その行為を犯した者たちの行動に責任を負う将校たちを厳格に罰するべきである」と批判している。

いま日中関係は、経済面では順調といえるが、政治的な関係は小泉首相の靖国神社参拝問題などでギクシヤクしている。靖国問題は中国側の過剰反応だという意見もあるが、東条英機らA級戦犯らも祭っている靖国神社に小泉首相が参拝することは、かつて日本に侵略され多くの被害を受けた中国人には許すことができないものだ。ドイツの現在の大統領がヒトラーの墓に参る行為と同じように映っていると言えは、少しは納得していただけるだろうか。日中問題の解決には、日本側の過去の歴史を踏まえた真摯な態度が不可欠であると思う。

2004 9. 22、神戸新聞

「神戸・南京をむすぶ会」をはじめ、日中両国の市民や研究者らが参加し、毎年開かれている追悼集会＝中国・南京



毎年八月、日本軍の中国侵略の現場を歩き、戦争の悲惨さを学んでいる「神戸・南京をむすぶ会」の訪中報告会が二十五日、神戸市灘区山田町三の神戸学生青年センターで開かれる。今年は南京に加え、日清戦争時、日本軍による虐殺があった旅順を初めて訪問。原則的に外国人を受け入れていない記念館などを訪れ、メンバーにとって「日本ではほとんど知られていない事実を学ぶ旅だった」という。

(磯辺康子)

参加者は兵庫、大阪、奈良などの二十人。一九九七年から毎年続いているが、昨年は新型肺炎(SARS)の影響で初めて中止に。今年は七回目、八月十三日から二十一日まで南京、旅順、大連などを巡った。

「旅順虐殺」は一八九四年十一月、四日の間に起き、死者は一万とも二万人ともいわれている。当時、英字紙「神戸クロニクル」の記者として活躍していた小泉八雲(ラファディオ・ハーン)は、同年十二月に批判記

「旅順虐殺」学んだ旅

神戸・南京をむすぶ会 記念館など初訪問

25日報告会

事を掲載。海外でも報道された。一方、日本では歴史教科書でもほとんど取り上げられていない。旅順では、日本人がほとんど訪れたことのない施設で、虐殺による死者の墓地となっている「旅順万忠墓記念館」を訪問。また、日本の植民地支配に抗議して伊藤博文を暗殺した韓国の民族独立運動家、安重根が処刑された「旅順監獄」も訪れた。

南京では、「南京大虐殺記念館」を訪れ、毎年参加している追悼集会に参列。虐殺の現場を知る八十二歳の生存者の証言も聞いた。「むすぶ会」には高校生の参加者もあり、日中の高校生との交流が初めて実現した。

団長を務めた高校講師の徳富幹生さん(モリ)は「神戸市東灘区」は「旅順虐殺の歴史をほとんど知らず、今回の旅で多くのことを学んだ。中国の人々が『遠くから来てくれてありがとう』と温かく迎えてくれたことなど、現地で感じたことを報告会で伝えたい」と話す。

午後六時～七時半。無料。同センター ☎078・851・2760

日清戦争・旅順虐殺を学ぶ

「神戸・南京をむすぶ会」第7回訪中団に参加して

(新報文庫 No.223, 2004.9/28)

「神戸・南京をむすぶ会」は南京大虐殺から六十一年目の一九九七年から毎年八月、南京と中国各地の戦跡を訪ねる旅を続けている。今年は七回目で南京と大連、旅順を訪れた。大連は関東軍が大陸侵略の足がかりにした「旧満州」の大都市。旅順は日清戦争の時、双方から狙われた軍港であるが、戦争さなかの一九四四年十一月に市民二万五千名が虐殺された「旅順虐殺事件」があったこととは日本ではほとんど知られていない。

日本は先の大戦中、中国各地で中国人民を多数殺害して「戦害」と評される事件を引き起こしたが、その遺体を集めて埋葬したところを「万人坑」と呼ばれるもので、今でも各地に多数残されている。旅順事件で殺された人々は「萬忠墓」にまうられているが、これはいちばん最初の「万人坑」と呼ぶべきものである。旅順は今でも外国人には開放されておらず、私たちの旅は特別の許可を得て「萬忠墓」と「旅順監獄記念館」を見学できた。何度か建て替えられたが、一九九四年中半戦争（日本で言う東洋の乱）百周年の記念で全面改修が行われ、立派な資料館が出来ている。ここには戦争と虐殺の詳しい経過が展示されていた。日清戦争とその後の日露戦争は、開国間もない



虐殺記念碑(草鞋峡)の前で黙祷しているところ(南京)

日本が諸外国の圧力に抗して勝った戦争、世論の支持を得て国家一丸となつて闘い、有色人種が白人種に勝った最初の戦争として美化されることが多い。しかし詳しい経過を知り、立場を變えて戦場となった朝鮮、中国の人々の目から見ると、日清戦争に至るまでの諸事件「台湾出兵（一八七四年）、江華島事件（一八七五年）、甲午政変（一八八四年）」などいずれも日本側の陰謀と言いがかりによる武力行使の繰り返しであることが分かる。日清戦争も、反尾が収束したのに清国軍に数回する出兵を行い、対立を深めて開戦に持ち込んだのが、初代の外務大臣陸奥宗光であった。

戦況は日本の勝利で推移するがその最中、旅順陥落の十一月、味方の日本兵の遺体が陵辱されたのに復讐心を燃やし、旅順市内で西口開にわたって虐殺を行ったのだ。た

たその数二千人、二万五千人は無抵抗の市民であったという。虐殺は国のマスコミは一斉にこの事件を報道し、野蛮な国として日本を非難し、このことが後の三國十條を容易にすることになった。力づくで奪った遼東半島も結局返還し、真相を知らされない国民は「臥薪嘗胆」をスローガンにロシアへの怨念を深め、日露戦争へなだれ込んでゆく。

日本軍の陰謀を語り言いがかりをつけて開戦に持ち込む手口は植民地、柳条湖、上柳条湖と似ており、宣戦布告前に奇襲攻撃するのも太平洋戦争と同じである。はき違えた復讐心を燃やして残虐行為を行ったのも、一九三七年の南京や二〇〇四年のイラク、フアルージャにおける米軍と同じである。

今回、南京は今も残る日本式の神社を見学したが、「万人坑」と同じく、これも中国各地に多数残っている。中国の人々は、それを見るたびに抗日戦争を思い出しながら生活しているのだと思つて、清国神社に参拝する小泉首相や閣僚の行為がどんなに反発されるものであるかが分かったような気がした。歴史から学ぶということがいかにむずかしいか、大切なことであるかを再認識させられた感があった。

門水三枝子



北京「環球時報 GLOBAL TIMES」2004.8.18



現代快报（南京）2004.8.16



南京晨报 2004.8.16



金陵晚报(南京)2004.6.16

(9)むくげ通信 206号

2004. 9. 26

.....
神戸・南京をむすぶ会

上海・南京・大連・旅順フィールドワークに参加して 飛田雄一
.....

8月13日から21日の9日間、神戸・南京をむすぶ会訪中団に参加した。今回は、上海・南京・大連・旅順を訪ねた。南京では、南京大虐殺の現場や南京神社跡などを訪ねたが、ここでは朝鮮関係のことを報告したいと思う。



上海では、魯迅公園をたずねた。1932年4月29日に尹奉吉がこの公園(旧虹口公園)で天長節の式典時に爆弾を投げつけたのである。これにより上海派遣軍司令官の白川義則、上海日本居留民団長の河端貞次らが即死し、重光葵公使、第3艦隊司令官の野村吉三郎ほか数名が重症を負った。

以前「(重光公使に?)不幸にして当たらず」という新聞記事がでて問題になったということを知ったことがある。その記事のことを確かめようと思ったが未確認である。どなたかご存知の方がおられたら教えていただきたい。

記念碑の近くに朝鮮風の梅亭がありそこが尹奉吉記念館となっている。閉館時間になっていたが無理をいって開けていただいた。中では朝鮮族の女性が丁寧に説明してくれた。



尹奉吉記念館のある梅亭

尹奉吉は、忠清南道礼山で生まれた独立運動家で、中国に渡ったのち金九の韓人愛国団に入って独立運動を展開したのである。金沢で処刑され陸軍墓地の通路部分に暗葬され戦後に正式に埋葬されたことでも知られる。



記念館内の展示

今回のフィールドワークの目的は南京大虐殺と旅順虐殺だった。旅順虐殺については、加藤周一氏が1988年8月23日付本紙夕刊の「夕陽妄語」欄『南京』さかのぼって『旅順』で触れている。戦闘が終了したのちにも、旅順と南京で民間人に対する虐

2004.9.26

むくげ通信 206号(10)

殺が行われたが、加藤氏は、この二つの事件は、海外でよく知られた事件だが、日本政府が日本人に知らせようとせず、責任の所在を明らかにしようとしなかったことが共通していると述べ、旅順虐殺が南京大虐殺につながったとしている。また神戸時代のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）も「神戸クロニクル」1894年12月7日付紙上で「日本軍の行為はなんの言い訳も受け入れられないであろう。（中略）婦人、子供や非戦闘員に対する不必要な残虐行為については、その行為を犯した者たちの行動に責任を負う将校たちを厳格に罰するべきである」と批判している。



萬忠墓

その犠牲者の「萬忠墓」が旅順にある。敷地内にはよく整備された記念館もある。ちなみに日清戦争の中国での名称は「甲午戦争」のようだ。



安重根

もう一カ所、旅順で訪問したかったのが安重根が処刑された旅順監獄である。正式名は「旅順日俄監獄旧史址陳列館」である。「俄」はロシア

が作った監獄を日本が日露戦争ののちに増改築して作りあげたものである。萬忠墓とともに外国人に公開されていない施設で当初見学できないとの通知を受けたが交渉のすえ行くことが出来るようになった。安重根のために特別に準備されていた部屋も、また朝鮮独立宣言を書きここで病死した申

采浩が入れられていた部屋も見学した。図録『難以忘却の一頁―旅順日俄監獄・上集』および日本語の解説もある『血・魂』および、20分程度の映像が収録されたCD-ROMを買い求めてきた。



特に処刑場ではショックを受けた。ソウルの西大門刑務所にもある形式だが、ロープが3本も吊り下げられているのである。また、

処刑後、死体が硬直するまでに木の丸い棺桶に折り曲げていれ埋葬したのである。その棺桶が一部記念館内に移され展示されていた。その棺桶も最後の時期には木材が不足して底の抜けたものを作り死体を固めるだけに使用して溝を掘って埋めたのである。



旅順監獄



監獄内の安重根の部屋

神戸・南京をむすぶ会の訪中団は今年で7回目。SARS 事件で中止した昨年を除いて1997年から毎年夏に行っている。日本の侵略の現場を訪ねる旅は、気が重くなることも多いが毎年新しい発見のある旅である。来年も南京ともう一カ所を訪ねることになっている。

.....

神戸・南京をむすぶ会第7回訪中団・報告集

2004年9月25日 仮報告書発行(50部)

2004年10月7日 改訂版発行(50部)

2004年11月13日 再改訂版(30部)

神戸・南京をむすぶ会(代表・佐治孝典)

〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 神戸学生青年センター内

TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878

郵便振替<00930-6-310874 神戸・南京をむすぶ会>

e-mail hida@ksyc.jp <http://www.ksyc.jp/nankin/>

.....